

正義の味方の異世界生活

N瓦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界で生きる正義の味方——。

『霧の魔獣』討伐から始まる、異世界生活。

目次

— 運命の夜 —	
Prologue	1
— 白鯨討伐 —	
第一話	9
第二話	20
第三話	26
第四話	39
第五話	62
第六話	70
第七話	80
第八話	88
第九話	97
第十話	110
第十一話 『正義の味方の異世界生活』	119

—運命の夜—

Prologue

「ここに——白鯨が、出るんですね」

「ああ。携帯……この魔法器ミーティアが鳴るから」

推定樹齡千年を超えるだろう、規格外の大きさとして知られる「フリーゲルの大樹」。その近くで野営をする一団があった。

それは王選の大本命クルシュ・カルステンを筆頭に、王選参加者であるアナスタシア陣営そしてエミリア陣営——最も、二人のみではあるが——によって組まれた魔獣討伐隊だ。討伐対象は四百年に渡り、世界に害をなしてきた『霧の魔獣』白鯨。

その一団と離れた木の根元で向かい合う、一組の男女がいた。

「そのミーティアが魔獣の存在を教えてくれる……ですよね、スバルくん」

「ああ、そゆこと」

一組の男女——エミリア陣営所属のナツキ・スバルとレムである。

そもそも、この大討伐隊が組まれた切っ掛けにはナツキスバルがクルシュに掛け合ったことだ。スバルは、クルシュ陣営が空を泳ぐ巨大な白鯨の討伐を求めている事を、数度の死タイムリープに戻りより推察したのだ。さらに、スバルが体験したその死に戻りの一因として白鯨も絡んでくるため、スバルにとつてもクルシュ陣営にとつてもWin-Winな討伐隊編成と相成った。

そしてクルシュが、「白鯨の出現場所とその時間」というスバルの言葉を信じた一助に、彼が今手に持つミーティア、即ち携帯電話が一役買っていたのだ。

スバルは、クルシュにもレムにも「このミーティアが白鯨出現を知らせる」とだけ伝えている。クルシュ達は携帯電話の役割を「白鯨の接近を感知する特殊なミーティア」なのだと思えたはずだ。事前情報

が無い者が、スバルのその言葉を聞けば誰だってそう思う。

「ぶっちゃけ、これ無しなら俺の価値は——」

「嘘でしょう?」

「え?」

が、彼を愛する少女はその解釈は誤りだと看破した。

「な、何を言ってますのん?これが嘘ならワイはどうやって……」

「ふふつ。スバルくんカララギ弁は似合いませんよ?」

「い、いや、これが嘘ってどんな疑いだよ」

スバルは数度に渡るループで絶望の淵に叩き落とされるような経験を何度もした。その中でスバルが体験する死に戻り関連の情報を他者へ開示した瞬間——その相手が死んだことだってあった。

レムにそうなって欲しくはなかった。その為の討伐隊でもあるのだ。だからこそ、スバルはシラを切り通す。

「実際、クルシユさん達は納得してくれた訳だし」

「いいえ、それは違います。クルシユ様はスバルくんが嘘をつく必要がないとお考えなだけです」

「それ、は……」

だが反論の余地のないレムの言葉に、スバルは二の句を告げなかった。

あくまでレムのその言葉は、スバルの持つミーティアが白鯨出現を察知することが嘘だと断ずるには至らない。

しかしスバルの態度が答えそのものだろう。狼狽してしまった時点でスバルの負けなのだ。

更に。何度もスバルを打ちのめす現実から逃げようとした彼をどこまでを助け、手を差し伸べ、鼓舞したレム。そんな彼女に嘘をつくというのは、スバルにとって余りに心苦しいものがある。全てを吐き出し、彼女の純愛に甘えそうになるほどに。

——だがそれは出来ない。その行為は、恐らくレムを殺すことにつながるだろうから。

「レム……俺、は……」

彼女を守るため、取り繕うような言葉でその場を逃れようとする

が、

「いいんですよ、スバルくん」

「……え？」

しかしそれは、レムからの拒絶で返された。

「スバルくんが嘘を吐いていることくらい、レムには分かります」

そもそも何故、レムはスバルの嘘を見抜けたのか。

それは――

「だって、ずっとスバルくんを見ているんですから」

「――っ」

スバルへの純粋な愛だった。

「なんで嘘をついたのか、その理由を話せないことも分かります。でも別に、それを話せないからといって、レムに気を遣う必要なんて無いんですよ？」

だってレムは――スバルくんを丸ごと信じてますから」

照れくさそうに微笑む少女と、無言で彼女を見つめる少年。

二人の間を風が優しく通り抜けた。

「スバルくんが白鯨の現れる場所を知っていると言うのなら信じます。魔女教がエミリア様たちを狙っていると言うのならそれも信じます。仮に月が落ちてきて、国が滅ぶとスバルくんが言うのならそれだって信じられます」

「……そこまでは言わねえよ」

「はい、そうですね」

口元に手を添え一瞬、笑う。そして笑みを消し、

「でも、それだけ本気だつてことですよ」

ふと真剣な目が変わる。それから彼女は静かに腰を落とし、スカートの端を両手で摘まんでお辞儀すると、

「この身、この心は全て、スバルくんに心酔しております。――故にレムは今も、これからも。スバルくんを疑うことは絶対にありません」

「――っ」

「だから信じさせようだとか、嘘で丸め込もうだとか。そんな風に自

分を追い詰めたりする必要、どこにもないんですよ」

喉が詰まるように、熱いものがこみ上げてくる。スバルはそれを寸前で堪えた。

そして目頭を押さえて顔を天に向けて震える口を大きく開くと、

「あー、やつぱおおきな木を見るとテンション上がるなあ……！」

「はい、そうですね」

「こりやしばらく見上げてないと落ち着かないなあ……っ！」

「はい、そうですね」

レムの信頼に、愛に、心に触れたスバルは、己の馬鹿さ加減にようやく気づいた。

初めから彼女を頼ればよかったのだ。未来に起きる何もかもを打ち明ければ、きつと惨事は防ぐことが出来たのだ。

涙を誤魔化すために上を見上げ続けるスバル。
しかしこの一時は不意に終わりを告げられた。

「……え？？」

「下がって、スバルくん！」

「え？…え？」

突然、レムに抱き寄せられる。涙するスバルを慰めようと抱きしめたのかと言え、そうでは無い。

その証拠に彼女の声には焦りと警戒心が混じっている。

「おい、レム。一体……」

「スバルくん、下がっててください」

レムの手には、いつの間にかモーニング・スターが握られていて、明らかに戦闘態勢に入っているのが見て取れる。

「樹の陰に何か、います。音が聞こえませんでしたか？」

「い、いや。俺はわかんなかったけど……」

レムは根元に生える草を踏む音が聞こえたのだと言う。

先程までの幸せな時間を邪魔した「何か」は一体、なんだと言うのだ。レムは警戒するように、スバルは目付きを活かして半睨みするうちに、樹の陰をじっと見つめている。

「そこに…誰がいるのか？」

スバルには何も見えていなかった。恐らくレムにもハッキリと見えていないのだろう。もし見えていたら、「何か音がしなかったか」などと問わないだろうから。

一方、そこにいるという確信はあるようで。

「——姿を見せなさい！」

一向にレムは姿を見せない「何者」かへ言った。

それでも直後は陰に変化がなく。そのままレムとスバルが数秒見つめると——

「いや失敬。君たちが何やら取り込み中だったようなので、割って入るのも無粋なものだと思ったのだよ」

樹の陰から一人の男が現れた。まるで降伏していると言わんばかりに両手を上げながら姿を見せたその男。

空には星が輝いているが、その顔はよく見えない。ただ、高い背、白髪と浅黒い肌。そして赤い外套を身にまとっていることといった身体的特徴。そのことだけはスバルにも分かった。

姿を見せた男は、レムが口を開くより早く話しかけてきた。

「ひとつ聞きたいのだが、いいだろうか？ここがどこか教えてくれな
いか？」

余りに予想外すぎる男の質問にスバルは啞然とし、レムは怒りを隠せないように言葉を返す。突然現れた謎の男が、今いる場所を聞いてきたならば、普通ならば困惑あるいは怒りを覚えるに決まっている。

「……ふざけた質問をしないでください。質問したいのはこちらです」

「別に私はふざけて等しいが……まあ、不審がられているのは紛れもなく私のようだ」

一度、肩を竦めた後にこちらに向き直る赤い男。

「その警戒を解けるならどんな質問でも答えよう」

どちらの立場が悪いかは客観的に見れば一目瞭然。にも関わらず、彼は尊大な態度をとる。

赤い男は、この樹の傍で夜営を始めた時はいなかった。つまり、夜営開始後にここに現れたということだ。

しかし白鯨討伐にあたって、周辺の街道は全て封鎖している。カードが言っていた。例え、街道以外の道を通ってきたとして、クルシュ・ヴィルヘルム・リカードといった実力者から気付かれずにこの大樹に到達するのは、決して容易ではない。限りなく不可能とさえ言っている。彼らはスバルが呼び出されたこの世界において、かなりの強さを誇るであろう三人なのだから。

故にその疑問を全面に、レムは解消するべく核心を突く質問を投げ

る。

「あなたは一体何者ですか」

「ふむ……なんと言うべきか」

男は考え込むように口元に手を当てる。

何かあれば即座に対応できるように、レムは身構えていた。それだけこの男に対する警戒レベルが高い。

姿を見せてなお、一団の中にいるクルシュらにバレていないのだ。

はつきり言って——それは異常だ。

本人の実力差が一定以上になると、それを隠すことができるというのは通説。しかしクルシュ・ヴィルヘルム・リカード達に対して、それをやってのけるこの男が何よりも恐ろしい。

現に、レムはこの男から「強さの匂い」はしてこない。それが余りに不気味である。

そんな男が何を言うのか。

その在り方だけで警戒心を抱かせるほどの実力を保有する者だ。その名は大陸に轟いているに違いない。

——しかし。

彼の答えは、この世界をあまり知らないナツキスバルに対してのみ多大な衝撃を与えた。

「そうだな……アーチャー、とでも名乗っておこう」

「……ツツツ!!」

「……アーチャー?」

聞いたことのない名をレムは口の中で転がす。

「それがあなたの名前ですか?」

その名前は決して各国の「最強」とされる彼らと一致しないものだ。

しかし先程も言ったように、クルシユや剣鬼を欺くとなると、それに近い実力がないと辻褄が合わない。

だからレムは名前を問い返した。

しかしそれに答えたのは——スバルだった。

「いや……多分違う」

「!」

見るに、自信なさげに口を開いたスバル。しかし引つかかるものはあつたようで、そんなスバルの顔をレムが覗き込んだ。

「スバルくん、何か分かるんですか?」

「ああ。まあ確信はないけどな」

「もし聞きたいことがあれば聞くといい。先程も言ったように、私が可能な範囲でならばなんでも答えよう」

あくまで不遜な態度を貫く男に、スバルが質問を投げかけた。

「そうかよ……なら聞くけど、そのアーチャーってのは……どんな意味だ?」

答えによつては、この男が先ほどした質問の意味も分かるはずだ。

もつとも、『アーチャー』というのが本当の名前ならば話は別だが。

しかし彼は、スバルが望んだ答えを返す。

「そのままの意味だが? 私はアーチャー……ただのしがない弓兵さ」

——アーチャー
弓兵

この意味で「アーチャー」という言葉を使うこの男。

「……………まじ、かよ」

地球生まれの地球育ち。英語という言語を知る男。正体不明の赤い男は間違いなく——スバルと同郷の者だったのだ。

▷▷ To be continued

この日、ナツキスバル少年はアーチャー運命と出会った——。

—白鯨討伐—

第一話

いつか。

七人の魔術師の七騎の英雄達による殺し合いに呼び出された、いつか。

あれから赤い騎士は、在り方が変わったのだと強く実感する。

『——お前には負けない。誰かに負けるのはいい。けど、自分には負けられないツツ!!』

過去の自分衛宮士郎を殺さんと戦うその果てで、理想を追い求めるその少年に負けた。

彼が対峙したのは理想に裏切られ、夢破れた己。なんの思いも持たず、救うべき者も持たなかった偽善者の成れの果て。

しかし、
『この夢は、決して。例え俺が偽物であっても、決して。間違いなんかじゃないんだから——』

その少年は進む道が地獄だと理解して尚、その理想を曲げなかった。勝てないと知って、そのまま突き進むその姿こそが過ちだとした未来の自分赤い騎士。だが、そんな理想に殺された赤い騎士を、少年は叩き斬った。

抑止力として存在する中で、過去の記憶などはとうに薄れた。自身が体験したはずの聖杯戦争の事も、もうほとんど覚えていない。

だが、今なお夢を追い続ける衛宮士郎に敗れたこと以外に、もう一つだけ強くそして鮮やかに焼き付いた記憶がある。

それは、聖杯戦争が終結したあの日。自分を斬り伏せた少年が、黄金の英雄王から大金星をあげた日。朝焼けの眩しい丘で、かつての主だった少女と交わした会話だ。

『——私、頑張るから』

その光景は何度も思い出す。その言葉は、今だって覚えている。

『あいつが、あんたみたいにひねくれた奴にならないよう、頑張るか』

衛宮士郎を遠坂凛に託した。理想に裏切られた、そう思った自分のようにならない為に。

衛宮士郎の側に遠坂凛という少女がいるのなら。若しかすると、エミヤは生まれないかもしれない——そんな希望が込められた、遠い遠い未来の話。

ただ、この頭の良い少女は分かっていた。

赤い騎士は英雄——否。守護者として居続ける他、無いだろうという事を。赤い騎士には救いの物語が用意されていないという事を。

例え、衛宮士郎がエミヤという未来に到達しないとしても、目の前の赤い騎士は既に存在してしまっているのだから。

しかし、彼女はその一切合切を承知した上で、

『——だから、今からでも自分を許してあげなさい』

本来、この赤い騎士に救済など用意されてはいなかったはずだ。しかしその言葉は、一体どれほどの救いになったのか。少女の言葉は、間違いなく彼を救った。

あの日からどれほどの時間が過ぎたかわからない。守護者は時間

の環から外れた存在として扱われるため、そも時間という概念そのものが、彼にとつて無いかもしれない。

長く、無限に感じる時の中で、何度叶うことの無いやり直しを求めたことか。幾度かつての選択を後悔したことか。「世界」と契約した時のことを、エミヤは永劫呪い続けることだろう。

——だが、答えは得た。万人に笑顔でいてほしい。そんな理想を叶えようと走り抜けたこの道は——決して間違つてなど、いなかった。

「ふむ」

気付けば、草原に赤い外套を着た男が立っていた。

何、いつもの事だ。気になどはしていない。

守護者として存在する彼は、様々な時間軸の世界各地に飛ばされ、世界の調和のために動く。

「ハハハ」

だが驚きの重点は別のところにあつた。

普通ならばアラヤから指令、或いは命令のようなもの——あくまで具体的に言語化はできないような代物ではあるのだが、便宜的にそう呼ぶことにする——が言い渡される。しかし今のアーチャーには何の情報も渡されていないのだ。

何度も世界の各所へ飛ばされた経験の中で、そんなことは無かつた。

しかし、守護者である自分が飛ばされたのだ。恐らくそういうこと

なのだろう。ここで今から何か起きる。そして、赤い男はそれを「処理」する。それだけだ。

それでまた座に戻され、いずれ別の所に再び送られる。——それが抑止力としての在り方だ。かつての戦争で、騎士が自身のことを「ただの掃除屋」であると皮肉つたのも納得がいく。

そんなことを考えながら、前方はあまりに広大な草原。ならば後ろは？

そう気軽に振り向けば——

「——」

圧巻の光景が広がっていた。自身の目の前に聳え立つ、ありえない高さの大樹。その豪壮さは、守護者として各地に送られたその男ですら絶句するほどだった。

——いや、待て。こんなところ俺は知らない。

草原の中に一つ立つ樹。まだ世界の意思と契約する以前は、世界中を旅したこの男が、そんな絶景を見知らぬはずはない。送り込まれた様々な時間軸の中でも、見たこともなかった。

「ならば、どこだ？ここは」

それを根拠に新たに湧く疑問がこれだ。今、自分はどこに飛ばされたのか、と。守護者として新たな場所に送り込まれたことは、恐らく確定事項。だが、地球では無いどこか。

「——投影開始」

ならば確認せねばなるまい。アーチャーを英雄足らしめた固有結界から、無限の剣の一端を取り出すことが出来る魔術の行使が可能かどうかを。

詠唱を口にする——手には一对の夫婦剣が握られている。

「魔術回路の方もなんの問題も——ツツ！」

そしてもう一つ。驚愕の事実、たった今気づく。

「……受肉しているだど？」

英霊として存在していたはずなのに——受肉していることを今の今まで分からなかった。それほどまでに違和感無く、今までの感覚

との齟齬が無かったのだ。現にアーチャーには、この世界に来てから肉体を得ているという事実がしつくりきていた。

英霊の受肉。霊体化が自由にできないデメリットがある反面、顕現している際に魔力を一切消費しないというメリットがある。いや、その前になぜ肉体を得られたのか。

「どうしたものか」

明らかにイレギュラーな現状に考え込んでいると——木の向こう側から話し声が聞こえてくる。

野の真ん中に立つ樹の根元で会話する者などいるのだろうか。

いや、だが可能性は幾らでも考えつく。例えばここが神が祀られた樹としての役割があるとしたら。多くの人が、参拝に訪れてもおおしくない。他にも色々思い浮かぶ。

しかし、確認してみないことには事実には分らない。

気付かれないように、そっと樹の向こう側を覗いてみれば——

『——だって、ずっとスバルくんのことを見ているんですから』

……なんだか恋人のような二人組が話してた。彼としても流石に邪魔できる雰囲気では無い。

どうしたものかとそのまま周りも見れば、星空の元で一団がキャンプをしている。テントを張り、火を焚いていた。この二人は一団から離れて、木の下で話しているのだろうか。

後ろ姿しか見えない男と、優しい笑みを浮かべるメイドと思われる少女。二人の話はまだ続く。

『スバルくんが白鯨の現れる場所を知っていると言うのなら信じます。魔女教がエミリア様たちを狙っていると言うのならそれも信じます』
男の名前はスバルというらしい。少女の口から、「白鯨」「魔女教」と知らない単語がいくつか出てくる。

それから、少女はメイド服のスカートの端を両手で摘まんでお辞儀すると、

『この身、この心は全て、スバルくんに心酔しております』

彼らに介入するのは無粋も無粋だ。ここがどこか、話を聞こうと様子を窺ってみたが、思ったより話しかけづらかった。

困ったものだ。ここに送り込まれたということは、先程も言ったが、近いうちにここできなにか起きるはずだ。あまり遠くに離れる事はできないだろう。

樹の周りにはキャンプする彼らしかいない。街や集落といった人の営みを感じられる所も、ない。故に彼らから話を聞くのがベストだと判断したのだが――

ガサリ。

どうすべきかと、一度木の陰に身を隠した時、落ちている細い枝を踏みつけていた。

しまった、そう思った頃にはもう遅い。

『スバルくん、下がって！』

『え？え？』

少女はいつの間にか持った鉄球を片手に、あからさまにこちらを警戒している。

些末な音でバレるなんてドジを踏んだものだ、と思いながらかつての主の姿が脳裏に映った。彼女もドジをやらかすことが多かった。そもそも、自分が呼び出された時、記憶が無かったのは彼女がトチったからだった。

そんなことを考えていると、

「姿を見せなさい！」

少女に先手を取られてしまった。

いや、バレた時点で先手は取られていたか。と言うよりも自滅だが。事後には姿を消すとしても、最低限友好的に関わりたかったものだ。

「いや失敬。君たちが何やら取り込み中だったようなので、割って入るのも無粋なものだと思ったのだよ」

こちらに攻撃する意思がないことを両手を挙げて伝える。紛れもない本心だ。

相手は呆気に取られたのか、質問を継がない。こちらから先に話していいものか。そう考えて先に質問することにした。

「すまない。ひとつ聞きたいのだが、いいだろうか？ここがどこか教えてくれないか？」

「ふざけた質問はしないでください」

一言で返されてしまった。

まあ怒るのも仕方が無い。現状を掴めていない自分も悪いが、文句は世界の意志に言ってくれ。そんな悪態もつきたくなった。

「……質問したいのはこちらの方です」

それもそうだ。仮に、私が逆の立場で恋人と話してる時に謎の男がやってきたら、頭に来る……かもしれない。彼女に怒りを買われ、そして警戒されるのも当然だろう。

「別に私はふざけて等しいが……不審がられているのは紛れもなく私のような。その警戒を解けるならば、どんな質問でも答えよう」

「……あなた、何者ですか」

「ふむ。何と言うべきか」

何者か、と。そう聞かれれば答え方は数パターン考えられる。エミヤという本名を答えるか、守護者としての自分を名乗るか。

——だが、ふと頭に浮かんだのはかつての主に何度も呼ばれた名。理由はよくわからないが、そう名乗りたくなった。

ここに飛ばされる前に、自分が呼び出されたあの聖杯戦争を思い返していたからだろうか。

「そうだな……アーチャー、とでも名乗っておこう」

決して間違った回答では無い。自身は確かに弓兵なのだ。事を果たしたら消える身としては、結局名乗ろうが名乗らまいがあまり関係は無い事だったが。

「……アーチャー？それがあなたの名前ですか？」

アーチャー
弓兵と名乗ったのだが、名前どうか疑問に思ったらしい。

否定しようと口を開こうとしたが——それより早くスバルと呼ばれた少年が答えた。

「いや……多分違う」

アーチャーとは即ち弓兵のことではあるが、この世には名前が多様にある。アーチャーという名も有り得なくはない、と思ったのだろう。恐らく。

「君が聞きたいことがあれば、なんでも聞くといい」

私は、話しかけるのを躊躇っている彼にそう言った。未だ警戒されているのはこちらだ。円滑にことを運ぶには、それは無いほうがいい。

「そうかよ……なら聞くけど、そのアーチャーってのはどんな意味だ?」「無論、そのままの意味だが?」

不思議な質問をするものだ。「アーチャー」が名前か否かを聞くのではなく、「アーチャー」という言葉の意味を問うてきた。これは、実に奇妙なことだ。アーチャーという言葉に意味がある、そう考えているなら答えは一つしかないだろうに。

だから私は、少年に当たり前の言葉を返した。

「私はアーチャー……ただのしがない弓兵さ」

「まじ、かよ……」

* * *

アーチャーと名乗った男の素性は大方、確信できた。彼は、スバルと同郷——つまり地球出身者だ。この場になんの前触れなく突然現れたことも納得が行く。

「……そんなに変な回答だったかね?」

「あ、悪い。もう一つだけ聞いていいか?」

「構わないとも」

「あんたの出身は、どこだ?」

スバルは先程は少し驚いた為、この質問をしなかったが、よく考えればこの質問をすれば一発で分かる。

「出身? 私はこのようなナリだが、れっきとした日本生まれの日本育ちだよ」

「……なるほど」

「スバルくん、スバルくん。ニホンって……」

「ああ。この男は俺と同じ故郷ってことだ」

レムは、スバルの出身が本ですら読んだことのない国「ニホン」だと聞いていた。そしてこの男も同じ国が出身と答えた。

レムの問いかけに頷くと、スバルはアーチャーに向かって数歩踏み出す。

「次は俺が質問に答える番だ。ここがどこか知りたいんだつたな」

「すまないな。私も戸惑っているのだ。教えてくれると助かる」

以前、アルから彼も異世界召喚されたという話を聞いたことがある。つまり、その程度ならセーフという判断がされたことに他ならぬ。いい。

「ここは異世界——魔法も獣耳つ娘も存在する世界だよ！」

日本生まれの者にこの世界のことを紹介するのは、部活の先輩として後輩に教える——そんな興奮がどこかにあった。

また相手の驚愕もそれ相応で、

「魔法が……この世界にはある、のか？」

アーチャーは目を見開いてこちらを見ていた。

「ああ、あるぜ。……けど、あんたはすぐにここから逃げた方がいい。もっと話をしたいんだけどな」

「ほう……？何かわかるのかね。それとも——先程言っていた『白鯨』とやらが関わっているのかね」

スバルとしても、もっと色々言いたいことは多くある。あくまで魔女に心臓を掴まれない程度に、だが。

しかし『霧の魔獣』討伐に向けて危険度は高まる。何分、彼がこの世界のことをあまり知らないのなら、逃げの一手を打つ他無いのだから。うから。

「今から、その『白鯨』って魔獣っていうやつと戦うんだよ。だからここは危ねえ」

「ふむ。ならば、私はどうすれば良い？」

そう言っただけでアーチャーは討伐隊をチラリと見た。なるほど。クルシユ達に何も言わずに立ち去れば怪しまれると

アーチャーは考えたのだろうか。スバルはそう推測した。

「スバルくん……」

気付けば、レムにジャージの袖を掴まれていた。レムより何歩か前に出て話していたのだが、いつも間にか彼女が後に立っている。彼を見つめる瞳は、心配さを孕んでいる。

スバルは分からないことだったが、レムはアーチャーの不気味な強さを理解しているのだ。故に不安も大きい。

しかし、スバルは『レムの不安』をならば見て取れた。その根拠は知らないとしても。

だから彼女を安心させるために、

「大丈夫だ。いざとなれば俺がレムを守ってやるよ」

「あ……」

彼女の頭を撫でた。それだけでレムは安心するのだ。この男がレムを不安にさせているとしても、いざとなれば身を挺して守ろう。

クルシュ、ヴィルヘルム、リカード、ミミ姉弟だっている。白鯨を狩ろうっていう一段ができれば、安心できるだろう。

「……はい。わかりました」

「うっし」

「私は君達に危害を加えるつもりは無いのだが……まあ、いい。結局私はどうすべきなのだ？」

「今からクルシュさん……討伐隊のまとめ役の人なんだけど、その人に話をつけよう。俺がなんとか話すから、あんたは逃がしてもらえば良いさ」

アーチャーが何故ここに、突然現れたかの説明（言い訳）は何も考えていなかったが、嘘さえつかなければなんの問題もないだろう。寧ろ、中途半端な説明はしない方が吉だ。

彼が前触れ無く現れたのは事実なのだから。

「話、とは魔獣狩りが危険だから私を逃がしてもらおうという話かね？」

「ああ。嘘さえつかなきやクルシュさんは信じてくれるさ。それに、関係の無い人にはなんの危害も加えたくないだろうしな」

「クルシユには最低限の説明だけして、後は戦場となるここから逃げ
て貰えば良い。」

「じゃあ行こうぜ」

「あ、スバルくん。待ってください」

スバルは、アーチャーをクルシユがいるテントまで先導するため、
先に一団へと歩き出す。当然、レムも彼の後ろをついていく。

それ故か、二人は気付かなかつた。

「魔獣狩り……か」

大樹へと寄り掛かりながら、小さく言葉を発したアーチャー。

「なるほど。面白そうだ」

彼が浮かべた獰猛な笑みを――。

▷▷T o b e c o n t i n u e d

第二話

「——ああ。君の言う通りだよ」

スバルに連れられ、アーチャーは五人と話していた。スバル、レムの他に三人。

クルシュという如何にも「戦乙女」らしい女性と、恐らくその人生で数百ではきかない程の人数を殺したであろうヴィルヘルムという老剣士。なるほど確かに、彼女は『魔獣』討伐の長に相応しい存在だろう。

そして最後の一人を見てアーチャーが驚いたのだが、それが「王国最高の癒術師」と名乗ったフェリスという獣人だ。

獣の耳を持つ姿をした者など——御伽噺といった類の中でのみ生きる空想上の存在だと思っていた。いや、アーチャーがいた世界ではそうだったのだ。

彼女があつてこそ、スバルの言う「異世界」という言葉が信憑性が増すというものだ。

「スバルが君に言った通り、私は気付いたらあそこに立っていた」
「……………」

スバル曰く、クルシュは嘘を見抜くことが可能だという。実体験付きらしい。なので、アーチャーは一切嘘をつかずに答える。

「……突然ここに立っていたなどというのは一先ず真実らしい」
「当然だ。下手な嘘をつけば信頼を失うのは私だろう」

「あくまで疑う余地もあるし、その原因も不明で理解はできないものだ。さて……卿をここら一帯から離れた所へ送ればいいのだったな」

『風見の加護』とやらを授かっている彼女がアーチャーの言葉を真実と断ずれば、その言葉は真実としてみなされる。

ましてやこの場にいるのはクルシュに忠誠を誓う二人、そしてスバルとレムだ。無駄に突つかかるはずも無いし、それに白鯨が姿を現すまでそう時間がある訳でもない。

万全を期して迎え打つ為にも、いち早くアーチャーには行動して欲しいところだったであろう。

故にこれ以上の問答は、不要だ。

「卿を送る兵を数人手配しよう」

「いや、それは遠慮させていただくよ」

「……何故だ？土地勘でもあるのか？」

「いや、そつちの話ではない。———どうだろう、私も白鯨討伐に参加してもいいだろうか？」

———ただし、アーチャーがこの場から立ち去るという前提があつたならばだが。

「……アーさん、今なんて？」

当然それに対するスバルの驚愕もわかる。……因みに、この「アーさん」というのはスバルがアーチャーを呼ぶ時の呼び方で、まあ由来は言うまでもないだろう。

「……詳しく理由を聞かせて貰おうか」

「そこまで思慮した結果ではない。なに、君たちの援護くらいなら容易くこなしてみせよう。勝てる可能性を1%でも上げたいのなら、私が加勢した方が良からう……それだけの話だ」

「確かに軍に一人でも多ければ多いほど勝算が高まるのは戦の鉄則だろう。が、それはあくまで一般的な話であつて、卿がこの討伐隊に参加するべき動機にも、して良い根拠にもなり得ない」

アーチャーの参加に対して、クルシュが懸念している点は二つ。指を一本立て、一つ目から説明する。

「先ず、根本的に卿の身分・立場の一切が不明だ。———これは我々にとって不安要素になりかねない」

「最もだな」

アーチャーは王選というものがこの国にあり、その候補者それぞれ

の三つの陣営が集まって作られた討伐隊だという話は、スバルから聞いていた。

それぞれが、それぞれの立場で参加している。魔獣に怨みがあったり、傭兵団として雇われたり。

そんな中、身元不明のぽつと出の男が参加するとなれば、士気低下にも繋がりがねない。戦とは、全体の士気という場の一体感の有無も勝利条件に関わってくる。例えそれが、『個』対『軍』だとしてもだ。続けて、クルシユは二本目の指もあげた。

「そしてどの陣営——この討伐隊に属する誰も彼もが、各々の確固たる覚悟を持って、今ここに集まっているのだ。一方、卿は不意にこの地に流れ着いたと言う」

そこで言葉を区切り、

「そのような卿が彼らと同じ覚悟で白鯨と戦えるのか？」

クルシユは真剣な眼差しでアーチャーを見た。

魔獣討伐の覚悟を問われれば、残念ながらそれを持ち合わせていない。だからここは正直に言うしかあるまい。

「私には君が言うような覚悟も無いし、かの魔獣との因縁やら私怨も無いのは確かだ」

スバル曰く、そういう者も多いのだと言う。クルシユの後に控えるヴィルヘルムの目を見るに、彼もそうなのだろう。それを分かっているからこそアーチャーは彼らとは違うと否定した。

「ならば、何故？」

しかし、クルシユの問に続いたアーチャーの一言。

聡明なクルシユをして、その簡単な言葉に言い返すことが出来なかった。

「——他人を助けることに理由などいるのかね？」

それが、エミヤの理想^{返答}だった。

一度はそれに裏切られたと思ひ、捨てたはずの信念。しかし^{過去の自分}衛宮士郎を通じて認めざるを得なかった、己の原点。

それこそが他人の幸せを求めて動いたエミヤが存在意義だった――。

「本気で……本気でそう言っているのか？」

『風見の加護』により真実と見抜いてるが為、逆に信じられないのだ。この男は本心からそう言っているのか、と。

ナツキスバルと会ってからというもの、授かった加護を疑いたくなることが何度かあったが――まさかこの男もバカ正直に常識外なことを語るのか。

「勿論だとも」

「それとも白鯨の危険度を知らないでの言葉か？」

「白鯨……四百年に渡ってこの世界に対して害を為してきた、空を泳ぐ巨大な魔獣……だったか」

「……ならばそれを分かかって何故、我々に加勢する」

クルシユはアーチャーの中に歪みを見た気がした。

初めは、自軍のために彼は参加しない方がいいと考えた。しかしアーチャーの一言で、クルシユの中の論点は一変してしまっている。アーチャーがこの場に突如現れた――原理も現象も全く理解できないが――ということとは、裏を返すと、アーチャーはクルシユ達のことを微塵も知らないのだ。だと言うのに、クルシユ達の助けになると言い出したことは、極めて興味深い事だ。

「白鯨の恐ろしさはここにいるヴィルヘルムが一番わかっているぞ」
名を出された事で、ヴィルヘルムは軽く礼をする。

「貴方のような強い方が身に染みて脅威を理解している……そのような魔獣は、さぞ規格外なのだろうな」

「例え、卿が強くても命の保証はできないぞ」

「いくらフェリちゃんでも、死んじゃったら生き返らせることはできないよー」

クルシユとて武人。戦乙女と呼ばれた女だ。アーチャーが強いこ

となど百も承知。だが、だからと言ってあの『白鯨』相手に無傷の生還は厳しいことも、知っている。剣鬼と呼ばれたクルシユの忠臣ですから、無傷では済まないのだろうから。

「それでも——」

「構わない」

「——」

だが、アーチャーは即答した。自分の身を案じる必要は無いのだと。

「ならば一つ、問を質そう。——何が、卿をそこまで突き動かす？」
「私の原動力、か……。使命感でも義務感でもない。今、私を動かすのは私の理想に他ならない」

「——」

——己の理想。

クルシユも大きな理想を掲げている。だから王を目指した。国を変えんとしているのだ。故に「理想」という言葉の重みを知るクルシユ。

そんな彼女が理想を語るアーチャーに、参加しないよう説得するのは——

「余りに野暮だったか」

こちらの事情を理解して尚、助けになろうとするその姿勢。彼の身分の不明瞭さだけなら目を瞑れる。彼は、ナツキスバルと同様に不思議と信頼できる——彼の周りを取り巻く『風』がそう言っているのだ。

「——ヴィルヘルム」

「は」

『鉄の牙』の方には話をつけておけ。それと、直に白鯨が現れるだろう。戦闘準備もそろそろ始める旨も伝えておけ」

「畏まりました」

今でも愛する妻の復讐のために剣を振るう鬼は、討伐を前に昂っている筈なのに——あくまで平静を保っている。最も、その戦いが始まれば戦場を駆け回る鬼と成るだろうが。

「さて、これで私の参加は認められたのかね」

「ああ、その通りだ」

「ならば——」

そう言うときアーチャーは手を差し出してきた。

「——よろしく頼むよ」

理想を追い求めている二人が、白鯨討伐に向けて固い握手を結ぶ。動き出す魔獣討伐作戦。——開始まで残り六十分。

▷▷T o b e c o n t i n u e d

熱い握手をする二人のそばで立つスバルは、思い返せばほぼ一言も話していない。

(あれー？俺空気じゃね？主人公って俺じゃなかったの？)

呼ばれていない誕生会に乗り込むという武勇伝を持つスバルでさえ、オーラ全開の彼らには介入できなかつたよう。

(ふふ。少し拗ねてるスバルくんもかわいいです)

そんな拗ねているスバルを見て、レムは優しく微笑んでいた。

第三話

「さて——。一つ、卿の価値を問おう」

ヴィルヘルムが『鉄の牙』団長リカードがいるテントへ、先の話をつづきに行つたあとの事。当然だがアーチャーはこの質問をされる運びとなる。

彼の参加決定がしたものの、運用場所を決めなければならぬ。各小隊は十五人であり、それは揃えるべきだろう。アーチャーをどこにどう組み込むか——考えものだ。そもそも組み込めない、と表現した方が適切であるが。

あまり時間はない一方、かと言って参戦を決めた目の前の強者を手放すのも惜しいと、クルシュが感じているのもまた事実。

「卿は我々に何を提供できる?」

「確固たる戦力を——と尋ねるのは求めてないのだろうか?」

「そうだな。あれほど自分を売り込んだのだ。それに見合う『何か』があるのだろうか?」

見返りを求めず、討伐の手助けを力強く申し出たアーチャー。しかし今の彼を見るからに、何の装備もない。

「あれ?でもアーさんって弓兵なんじゃねーの?」

「……何?卿は弓兵ゆみへいなのか?」

そもそも弓とは重宝されない武器として認識されていた。近距離戦闘ならば剣に劣り、遠距離攻撃においては『魔法』に遅れを取る——それが常識。廃れて行くのも必定だったろう。

「アーさんの弓と矢はどこにあるんだ?」

「ふむ……それに答える前に、確認したいことがあるのだがいいだろうか?」

「確認したいこと?」

それは、『魔法』について。

ここに来てから伝えられた『魔法』の存在。その時は目を剥いたも

のだが、しかし——彼の言う『魔法』とアーチャーの知る魔法との間に食い違いがあるのだろうか。今ではそう考えている。

そもそも魔法とは、並行世界間の移動や時間旅行と言った世界に干渉できる奇跡そのもの。——そこに魔法と魔術の決定的な違いがある。

魔法により生じた結果は、人間の文明力では再現出来ない。故に魔法は、単純な属性区分を設けることも難しい。

一方、魔術はそれが可能である。例えば焰を操る火の魔術、他者を治療する治癒魔術、出来損ないのレプリカを作り出す投影魔術。そのどれもが再現可能だ。火の魔術はライターや原始的であつても火打ち石を使えば、治癒魔術は医学を以てすれば、投影魔術は製造技術により。

だからこそ魔獣討伐が始まる前に、一度確認すべきなのだ。スバルは気軽な感じで「この世界には『魔法』がある」と教えてきた。

つまりスバルも『魔法』を、自分の目で見て、体験した筈である。彼の興奮具合を見ると、スバル自身も扱えるのかもしれない。魔法も魔術も知らなかった元日本人が、それと出会い、使えるとしたら。興奮したところで何らおかしくは、無い。

さてここでよく考えてみてほしい。文明の力をはるかに超えた時空干渉等の奇跡を、人は簡単に体現できるのだろうか？

答えはN Oだ。

ここまで考えると、結論は一つしかない。

彼らが解釈する『魔法』の定義と、アーチャーが知るそれが大きく乖離しているからである。そうとしか考えられなかった。

「——では聞くが、『魔法』とは火・地・水・風・空という基本五大元素から成り立つ……これで合っているだろうか？」

「んん……ちよつと違うね。そんなに事、どこで教わったの？」
フェリスがアーチャーが言った『魔法』に関する誤った知識を正した。

話を聞くにこの世界の『魔法』の基本属性とは火・水・風・土、加

えて陰陽。この六つなのだという。更に属性ごとに詠唱も決まっており、接頭辞として威力を決定する詠唱もあるらしい。

「なるほど……魔術とは違いがあるが……問題は無さそうだ」

先程、『魔法』と魔法は別物であるというアーチャーの推論を述べたが、次に考えたのは『魔法』≡魔術という憶測だった。それをもとに、彼の知る魔術の基本元素の質問を投げたのだが——あながち間違いでなかつたらしい。

ちなみに彼が知る機会は若しかしたら無いのかもしれないが、陰属性の極地には空間転移や時間凍結などの奇跡を齎す『魔法』も存在する。彼の考えは全て当たったという訳ではなく、実際は『魔法』≡魔術（+魔法）なのだろう。

さておき、この世界は元いた世界とは違い、大気中のマナが十分量あり、かつ安定している。幸い、アーチャーの魔術回路も正常に起動しており、恒常的な魔術の行使もそう難しくないだろう。

だがここは異世界。ここに住む人に限っては、魔術——いや、『魔法』を発動するまでのプロセスもアーチャーとは違うのかもしれない。

「——では私の武器がどこにあるか、だったかな」

本題に入る、アーチャーはそう言うのと両手を四人に向けて、

「さて。私の武器は——ここにある」

「——は？」

アーチャーの言葉にスバル、レムそしてフェリスがぽかんと口を開けた。

「貴方……ふざけているのですか？」

最も早く呆然から戻ってきたのはレム。あの樹の下で、アーチャーに警戒心を抱いてから今の今まで気を張っていたのだ。その反動か、呆れを思わず口にしてしまった。

「え、ええと…アーさん。それはなにかの冗談じゃ……」

「無い」

さらにフォローに入ったスバルすら一刀両断。

彼らはアーチャーになんと言うべきか思議していると。

「ふっ——」

不意にアーチャーが笑みをこぼした。

「——なっ!」

「ああ、いやすまない。君たちの反応が面白くてな、つい」

「な、なんだよ! やっぱ冗談なんじゃねえか!」

「徒手空拳の弓兵だなんて面白い冗談だね?」

アーチャー自身はなんの嘘も吐いていないのだが——彼らとしてはおちよくられたと思っても当然だろう。弓兵を名乗った男が、あろう事か自らの手を武器と言ったのだから。近接戦闘特化、武道派の弓兵——そんなものを弓兵とは呼ばない。(勿論、アーチャーにとっては耳が痛いことでもあるのだが。)

「いや……卿が言った先の言葉は嘘や冗談の類では無いのだろうか?」
如何にしてこの場を収めるか。そうアーチャーを見ている三人に正しい解釈を示したのはクルシュ。彼女には——『風見の加護』がある。

「勿論だとも。私は、このようなくだらない嘘など言わない」

「卿は勿体ぶるのが好きなようだ」

「私としてはそのつもりは全く無いのだがね……」

アーチャーは苦笑いしながら肩を竦めた。

「所で君たちが『その剣と全く或いはほぼ同じ一品を作れ』と言われたらどうする? 鍛冶屋にでも頼むか? それとも——『魔法』で作れるのか?」

そう言つて、クルシュが腰にある刀剣に指を指した。不意に投げられた質問に、適当な答えを最も早く言ったのはクルシュ本人だ。

「全く同等の剣の作成はほぼ不可能……だが殆ど同じという条件ならば、新たに鋼を鍛えてもらうだろうな」

『魔法』じゃ作れないってことか」

「いやそれは違うぞ。一つ考えを正そう、ナツキスバル。聞く話では土属性には『複製魔法』がある。故に『魔法』での製造ができない訳では無いのだ」

『複製魔法』——。エミヤが得意とする魔術に近いニュアンスのものだが。それが存在するこの世界で、なぜクルシユは真つ先に答えたのが、一からの作ることだったのか。

「ならば『魔法』で作れば良いのではないかね？」

「いや…残念ながら『複製魔法』は使い手が少ない。さらには複製と言うからにはあくまで二次的に作り上げるだけ。性能的にも多少なりとも劣る上、一度それを使えば複製元も劣化するので武器を作る上であまり重宝されないのだ」

「なるほど。つまり、完璧に近い複製魔法はないということか」

「その通りだが……」

——それが一体どうしたというのだ。

誰もが疑問を抱いてアーチャーを見ると、この問答の末に彼が言いたかったことを口に出す。

「私は、それを可能にする魔術が扱える」

「——？」

『魔法』では無く、魔術。普通なら使わない言い回しに首を傾げる四名。

彼らの注目を浴びる中。元いた世界でも異世界でもエミヤのみが唯一人使える魔術を唱える。

「——トレース 投影、オン 開始」

それは自身の心象風景に貯蔵されている無限の剣を取り出す、衛宮士郎エミヤにのみ許された魔術の発動。

「トレース・オン」——スバル以外には、意味の理解もできない言葉
葉をアーチャーが口にした直後、

「すつつげええええ！ かつけえええ!!」

「——嘘っ」

「そんなありえにやい……」

——彼の空いていたはずの両の手には剣と弓が。加えて、彼の周りに四本の剣が浮いていた。

「それは私の剣……？」

見るにアーチャーの手に握られているそれは、間違い無くクルシユの愛剣であるのだが……腰にはしっかりと剣がささっていた。

「まさか複製した、のか？」

スバルは同郷のアーチャーが『魔法』を使ったことに仰天し、三人は『魔法』により実現しえないことを容易く行つたアーチャーに息を呑む。……いや。スバルに限っては、それ以上に剣を扱う『魔法』に男のロマンを感じ、興奮したと言う方が正しかろう。

ここの世界の住人が扱う『魔法』の属性は火水土風陰陽の六つ。目の前で起きた事は、それらの属性では行えない。複製するには、元となる何らかの動作——今で言うならクルシユの剣を手取るなどの準備段階が必要であり——が無ければ行使できない。

しかし、アーチャーは抜き身ですらないクルシユの剣と同じ剣を複製して見せた。さらに彼を護るように浮く剣すら創り出した。

ならば、と。その剣は陰属性『魔法』により作られた幻影なのではないか——クルシユはそう考えたが、

「さて君のそれは真作、私のこれは贋作。違いが分かるかね？」

「——っ」

「凄い……本当に見分けがつかにやい……」

刀身を掴んで手渡された剣は確かに実体としてあり。さらにはクルシユは連れ添っている剣と、その贋作を見極めることすら困難であり——。

クルシユの驚きも当然だろう。仮に『複製魔法』で作られたものだとしたら、劣った剣などに見誤る筈もあるまい。

「これが私だけが使える投影魔術だ」

「魔術……か」

クルシユは剣から一度目を離し、アーチャーに向き直ると、

「一つ、問を発したい」

「構わないとも」

「卿が、この魔術とやらを使える条件はなんだ」

「ふむ……。私が剣を知っているか否か、だな」

アーチャーが自身の目で解析した剣を一度固有結界に貯蔵し、そこから取り出している。

例えば神造兵器はアーチャーであつても解析すら叶わないだろう。故に天地創造の乖離剣や、世界最強の守りたる全て遠き理想郷は投影できない。

だが。クルシユが使つてる程度の剣ならば、なんの問題もなく、見分けがつかないくらい同等の贋作は創り出せる。

さらに人生の中で数え切れないほどの剣を投影してきたアーチャー。最上の大業物でもない限り、鞘から抜かれていなくても彼は投影できる。

「――」

渡された剣をマジマジと見ながら、クルシユは目を見開いた。

彼の知る全ての剣が複製として実態化する――言い換えれば今まで見てきた全ての剣を創り出せる。或いは知識として蓄えた剣すらも。一体、幾つの剣を顕現できるのだろうか――。

「このように私は魔術で矢……。まあ剣ではあるが、それと弓を創ることが出来る。浮いている剣は射出することも可能だ」

そう言つて、空中にピタリと静止していた剣は光の粒子となった。

「――因みに……。魔術全般の才能があるという訳では無いので、そちらには期待しないで頂きたい」

「……。こんな現実離れたことやってのけて『才能がない』だなんて……。とんだ皮肉ですね」

為し得ないことが出来るアーチャーの謙遜は、レムや彼らにとっては皮肉に聞こえてしまうのもやむを得ない。しかしアーチャーが行使できる魔術は投影と強化のみ。紛れもなく彼には魔術の才覚は無かった。

「クルシュ、私は弓兵だ。討伐の際は外から引っ掻きまわそう」
テントの前には小さいトカゲのような生き物がいた。見るに彼らはあれに乗るのだろうか。

第一、小隊にアーチャーを入れたところで統制は取れないだろうし、トカゲの乗り方も知らない。彼とて、そういう"タチ"でもあるまい。

ならば、弓兵として遠距離から撃ち続ければそれでいいではないか。それが最も合理的なのだろうから。

「それに——弓に関しては、一定の自負を持ち合わせているのだよ」

「あ、でもアーさん」

ふと。アーチャーが魔術を使ったという事実に対してスバルが疑問をぶつけた。

『魔法』をなんで使えるんだよ。……まさか日本にも『魔法』があったのか!!?」

「厳密には魔術だが……些細なことは置いておこう。スバルの質問に答えるなら——『ある』、だな」

「うわぁ………まじか……」

全てはファンタジーの出来事だと思っていた魔術が、実は元いた世界に存在していた。その事実スバルを落胆させる。

若しかすると、生きていく中でそれと出会えたかも知れ——

「——ないかなあと思ったけど、俺引きこもりだったわ……」

そこまで考え自分のかつてを振り返り、閉ざされた可能性に再度肩を落とした。

「なに、スバルが特別気を落とすことは無い。そもそも魔術とは秘匿された存在だ。普通に生きていけば出会うことはまず無いだろう。

……それに魔術が、君が思うようなものかと言われれば………全面肯定は厳しい」

「いや………それでも『魔法』には夢があつてだな……」

スバルの『魔法』に対する理想は、魔術を知らない者は一様に持っているだろう。

しかしそれは、理想であって現実ではない。

「——君は、冬木市の大火災を知っているかね」

魔術とは決して万能でも無いし、その全てが人々の救いになる訳でも無い。

「…なんだ、アーさん。藪から棒に。まあ常識として知ってるぜ」
「フキキシ？」

「冬木市」という聞きなれない単語に首を傾げるレムの頭に手をポンと置き、スバルはその火災を思い出す。

あれは日本に名を残す大災害だったと記憶している。九州に位置する某県冬木市で起きた大火事。数百もの人が亡くなり、生き残りは数える程しかいなかったはずだ。

これほどまでに凄惨な「人災」——基本的に火事とは地震落雷等と違い、人間が原因である——は僅かのみ。あくまで知識としてそれを持っているのみなのでその程度しか知らないが。

そのスバルの知識に新たな、そして驚くべき情報が追加される。人災は人災でも、火の消し忘れなどという可愛らしい原因ではなかった。

「あれは、魔術師の争いが起因した災害だ」

「なっ——！」

「魔術師達が己の欲望を叶えようとした結果が、あれだ」

厳密に言えば違うが、スバルに説明する分にはなんの間違いもないだろう。

冬木の大火災は魔術師達による戦いが——正確に言えば、あの破壊者が望んだ厄災なのだ。一歩間違えたら、被害は冬木に留まらな

かったやもしれない。

「今のは一例であるのだが……故に魔術が、そして魔術師の全てが良いと言えれば答えは否だ。勿論、何事も使い手によるがな」

守護者として何人もの悪を企んだ魔術師を殺してきた経験もある。一方——善なる魔術師と言えれば真つ先に思い浮かぶのは、衛宮士郎^{自分}を託した彼女の姿だ。世界中の誰もが彼女のように優しければ争いなど生まれないものを——そんな幻想を夢見たことも少なくない。「魔術も異世界生活も、夢と希望だけじゃないって訳か……」

「——失礼します」

「あ、ヴィルヘルムさん」

と。そこへ、リカードのもとに行っていたヴィルヘルムがちやうど戻ってきた。

「…戻ったか。さて、返答は予想できるが一応聞こうか、ヴィルヘルム」

「はい。リカード様も快く御承諾なさいました」

「それは良かった。彼」——アーチャーの方を一度見て——「が参加してくれたのは嬉しい誤算のようだ」

「それは。私としても嬉しい限りでございます。リカード様はミミ様とヘータロー様をお連れして、数分したらいらつしやるとのことです」

「そうか」

クルシユはもう一度、先程の光景を思い出し——

「つと。これは卿に返そう」

「む」

手に持っていた複製体をアーチャーに返した。

「本当にこれで合っているかね？」

「無論だ。自分の愛剣を見間違えては武人の名折れだ」

笑いながら言うクルシユを見て、アーチャーとしても簡単に見分けられないと自信をもっていたのだが——そこでふと、彼女が宿す『風見の加護』を思い出した。恐らく彼女に言わせれば、真作と贋作で

は纏う『風』が決定的に違うのだろう。

それに、渡した時どちらの手で持っていたか覚えていればただ見比べただけで終わる。

「なるほど。——確かに正解だ」

「これ程までに精巧な複製は見たことが無かった。卿がどこから流れてきたのか、本当に気になるものだ」

「そうかね?」

光の粒に変わる剣を見てクルシユは、想定外の戦力に心から感謝する。彼が創り出す無限の剣は彼らにとって、最高の攻撃の一つになるだろうから——。

それから数分。クルシユ達が控えるテントに男——正確には「獣男」と二人の子供が入ってきた。

「失礼するで。——おお、アンタが樹にいたつちゅう兄ちゃんか」

「おおー、あかーい!くろーい!しろーい!」

「お、お姉ちゃん…:初めにそれは失礼だよ」

アーチャーが見上げるほどの大柄な男と、恐らく姉弟だろう二人。

一人は無邪気にはしゃぎ、一人は姉を宥め。

「ワイは『鉄の牙』団長のリカードで、こっちのちっこい二人が副団長のミミとヘータローや」

「ミミなのだー!」

「ヘータローです、お願いします」

「こちらこそよろしく頼む」

「よろしゅう頼むわ」

アーチャーはリカードと握手すると、次にミミとヘータローを見た。

彼らのような小さな子供が、世界から恐れられる魔獣と戦うという事実にアーチャーは感嘆している。さらに、二人は魔獣討伐に関わる傭兵団の副団長ときた。

「よろしく頼むよ、副団長殿」

アーチャーはそんな二人と視線を合わせるため、しゃがんでそう言った。

「ミミとヘータローは二人そろえばチョーツヨイ！オニーさんもやっぱりツヨイ？」

「ああ私は強いよ……それなりにね」

「うーん……う？それなり？それなりー？」

ミミは杖を抱き抱え、少し考え込むように顔を傾け、

「嘘はいくなくってお嬢が言ってた！おにーさん、だんちよーよりぜったいつよい！」

ぴよんぴよん飛びながらアーチャーに、嘘は良くないと。そして彼の強さを見抜いた根拠は理論的なものではなく、彼女の直感。

また見ず知らずの男より弱いと言われたリカードは、あくまで陽気だった。

「——ハツハツハ！兄ちゃんを見た時にそうも思ったんやけど、実際言われると傷つくわ！」

「ま、この中だとスバルきゅんがダントツで一番弱いけどネ」

「……え？ここで俺に話振る!?おかしくね!？」

「でも私はスバルくんを頼りにしてますよ。だからレムにスバルくんのことを白鯨と戦う時は守らせてくださいね？」

「レムううこんな俺を頼りに……って、待て。なんか矛盾してない？」

——場が笑いに包まれる。

今の彼らは、とても四百年間討伐がされずにいる怪物を相手取る一団には見えない。リラックススしていて——とても良い精神状態とも言えるだろう。

「——フツ」

祭りの前、人は高ぶる。

今の彼らくらい緊張が、魔物を狩るには丁度いい。

「さてナツキスバル。時間も差し迫っているのだろうか？」

「そうだな——じゃあみんな」

スバルが仕切り、

「とりあえず白鯨討伐に向けて最後の詰めをしますか！」

討伐に向けた最終確認。各隊の立ち回りや、白鯨に関する情報のすり合わせを今から行うのだ。

それぞれの陣営の代表である彼らの間でそれを行い——そしてフリーユージェルの大樹が見守る野で魔獣の出現を待つ。

「私はここに居てもいいのかね？」

そんな場に居ていいのか。アーチャーはそう聞くも、

「卿は是非いてくれないだろうか？」

「——」

「それに、卿は白鯨についてそこまで詳しい訳では無いのだろうか？」

あまりに愚問であり。クルシユはそんな彼に即答した。是非とも力を貸してくれと。白鯨に勝つために。

「——承知した。私で良いならば、幾らでも力を貸そう」

「感謝する」

——『正史』とは異なるこの世界。果たしてどのような道を辿るのか。

「さあ白鯨の野郎にぶちかましてやろうぜ！」

▷▷ To be continued

第四話

星々が夜空から見守る中——。

静かな風が吹く野で、スバルの携^{ミューティア}帯の音だけが静かに響く。

それは『白鯨』出現の合図に他ならない。その音が鳴ってから一分以内にかの魔獣が姿を現すとクルシユらに説明していたのだが、

「……どこだ」

未だその姿見えず。

クルシユは部隊の指揮を執る為に一番後ろに控えている。最も俯瞰的に戦場を見れるはずだが——。

まさか嵌められたか。そんな考えがよぎるも、しかしその場合スバルには何のメリットも無い。寧ろエミリア陣営の立場が悪くなるのみである。

やはり、魔獣は姿を見せるはずだ。あと数秒で。いや、いつ現れても何らおかしくは無い。

——最も緊張が高ぶる瞬間だ。別段、この討伐に限る話ではないのは当たり前だろう。人生何事も大きな事を成そうと始める直前と、そして終局へ届く直前を緊張無しでは語れない。

同時にそれは心地よく感じる。気分を害する緊張では無く、自分が生きていると実感できる胸の高まりである。今はまさにその時である。

だが。魔獣攻略開始を目の前に他の兵とは違い、精神状態が平時に近い者が二人いる。

スバルに全てを預けているレムと——そしてクルシユの少し前に立つこの男。

「何か聞こえないだろうか」

赤い外套を身に纏う、得体の知れない男だ。実力の底は未だ見えな
いが——この場の誰よりも強い。少なくともクルシユはそう見て
いる。かの剣鬼をすら、この男は容易く凌駕しているだろう。

「なんだと？……いや、私は聞こえないが。フェリス、何か聞こえるか」
「……特に聞こえにやいですよ？」

隣に立つフェリスも耳を澄ますが、彼は知覚できなかったと言う。フェリスは耳は先祖返りによるものではあるが、それは決して飾りではない。

が、そのフェリスを一刀両断するかのように否定する。

「——いや違う」

一向に現れない魔獣。一団も騒めき始めるが——その時。

「確かに、にやにか聞こえ——」

「上かッ！」

フェリスの耳も、その何かを捉える。同時にアーチャーは天を仰ぐと——

「————」

「あれが……！」

討伐隊の皆がアーチャーの声に反応して上を見る。その瞬間、誰もが息を止めた。恐れ慄くあまり呼吸を忘れるとはまさにこの事なのだろう。傑物たるクルシユ・カルステンですらそうだったのだから。

——白鯨が天を泳ぐ魔獣と言われていることは、決して比喻ではない。その鯨は水ではなく空を掻き、体から霧を吹き出しそれを泳ぐ。

そしてその霧は只の霧に非ず。触れようものなら、存在ごとこの世から掻き消える。恐ろしいことに、他者の記憶にも残らない。

故に『霧の魔獣』。この四百年で幾人も忘れ去られ、存在を呑み込まれ、消されたのだ。

「————」

夜の野に響く嫌悪感に溢れた鳴き声。精神そして頭に直接影響を与えるかのようだった。

月明かりを遮り、映し出された白鯨の射影は彼らの足を竦ませる。影の大きさだけで理解出来た。——これが、先代・剣聖すら屠った魔獣なのだ。

「————」

白鯨はまだこちらに気付いていないようだった。ゆつくりと天を游泳する魔獣に奇襲するなら今がベストだ。

にも関わらず、討伐隊の誰もが足を動かしていない。それは致命的な差と言える。

彼らが足を止めている理由が何であれ——例え命令を待っているのだとしても——白鯨に攻撃を察知されようものなら、それは確実に生死の境目となる。

それを分かっている。白鯨がこの場に現れることを事前に把握している。誰も——

「——ぶちかませえええええええ！」

《アル・ヒューマ》——「っっ！」

だがそれは違う。クルシユが声を発するよりも早く、スバルが叫んだ。それに合わせる様に白鯨の下腹へ飛ぶ巨大な氷の柱と——遅れて射出された一本の剣。しかしそれは、光となつて見えない速度で氷の柱を追い越した。

「——」

「ふん。聞くに堪えない鳴き声だ」

直後、氷柱は腹に突き刺さり。そして剣は白鯢の体を貫通する。

——この魔獣は四百年の中で、異物が体の中を通り抜けられる痛みを味わったことがあるだろうか。例えあつたとしてもそれは少ない。魔獣は痛みからか、体を大きく畝らせ、絶叫する。

一人はこの時に合わせて事前に魔力を練り、一人は魔獣の姿を確認するや否や即座に弓矢を投影した。

クルシユが前を見れば地竜に相乗りするスバルとレムが既に駆け出している。レムの腰に抱きついているスバルがこちらを見ながらガッツポーズをしていた。

「——」

そして次に、剣の発射地点である隣の男をフェリスと二人して驚きの表情で見ると、

「ん？…ああ、すまない。君の号令があまりに遅いものでな。手始めに一発撃たせてもらったよ」

いつの間にか持っていた彼の体程の弓を片手に、アーチャーが薄い笑みをこちらに向けていた。

——この男はなんという。

先陣を切った二人と弓兵アーチャーの放った一閃に討伐隊が動揺。

対してクルシユはというと——笑っていた。極めて好戦的な笑みを浮かべながら。

「総員、あの馬鹿どもに続け——ツツツ！」

彼らに後れを取らない為に先程の自分を振り払い、息を大きく吸って叫んだ。白鯨を狩るには先手を打つ必要がある。

「オオオオオオオオオオオオ!!」

『霧の魔獣』を地に落としかかるべく討伐隊の誰もが、号令に応じて攻撃を開始。大量の土埃が巻き上がり、その向こうで白鯨の絶叫が再度高らかにリーファウス街道の夜空へ木霊する。

今ここに、白鯨討伐の火蓋が切られた——。

闇払い、もとい”夜払い”の効力によって既に、空は昼と遜色無いほどに明るい。

闇払いと呼ばれる結晶石の効果は、本来なら周囲を明るく照らす程度だが、金と人員にものを言わせた結果がこの“夜払い”だ。

結晶石による擬似太陽を用意した目的は、単純に視界確保にあった。霧で視界を潰してくる魔獣相手に夜というコンディション。月明かりと星々のみでは、あまりに心許なく。暗さは確実に敵となる。故に夜払いを使用したのだが——それは同時に、白鯨の全貌が明るみになることを意味していた。

その風貌はあまりに凶悪で、あまりに不快で、あまりに醜悪。肌の白さは、美しいものでな決して無い。恐らくそれでかい図体も虚仮こけおど威しでは無く。

その証左に、誇り高き地竜が怯むほどであった。

だがそんなものは関係無い。——直後から始まる、連合軍による総攻撃。

剣で肉を裂き、矢で腹を穿ち、炎で肌を焼き。単純な総ダメージ量を考えて、スバルが百回死に戻りしてもお釣りが来る程だ。

『百人一太刀』で有名なクルシユの剣技や、彼女が用意した軍隊が放つ強力な魔術。アナスタシア・ホーシンが誇る傭兵団『鉄の牙』の働きもある。

その中で最たる活躍をしたのは——『剣鬼』ヴィルヘルム・ヴァン・アストレアだ。

十四年に亘る因縁の敵との念願叶い、対峙した鬼は、間違いなくこの場で最も戦いに没頭していた。鯨に乗り、その背全てを掻き斬らんとした。流石にそれは叶わずとも、彼一人で相当なダメージを蓄積させられたに違いない。空飛ぶ魔獣から零れ落ちてきた血の雨が大地を染め上げ、白鯨は痛みから空で荒れ狂っていたのがその証拠。

総攻撃の立役者に地竜であるパトラッシュ、そしてレムとスバルがいるのを忘れてはならない。

スバルは白鯨に奇襲をかけた後、そのまま白鯨を引き寄せる囮役を買って出た。その身から放つ『魔女の残り香』を存分に活用し、白鯨の意識を彼に向け——そしてクルシユらや『鉄の牙』の面々が白鯨

へ最高の奇襲を加えたのだ。

それが戦端が開かれてから今までの戦闘経過。完璧に近い奇襲の成功に、白鯨は反撃すらままならなかった。

「かなり効いた感じがするぜ！ このままいけるんじゃないか!?」

スバルは未だ爆炎吹き荒れる野の中で、レムと地竜に跨り、戦況を見ていた。勿論、彼にそれを見分ける力は無く——何となくではあるが、勝利は近いところにあるような気がしてきた。事実ここまで白鯨を完全に押さえ込み、決して少くないダメージを与えている。

しかしそんなスバルに対して、レムは悔しそうに未だ空に浮く鯨を見ながら言った。

「いいえ。本当なら——この奇襲で地に落としてしまいたかった」

彼女の言葉につられて顔を上げると——

「白鯨の高度が……下がってねえ」

幾つもの箇所から血を流し、放たれた炎の魔術により炙られた体は見ていて痛々しいものがある。それで尚、魔獣は高度を維持している。

「あんなに攻撃ぶち込んだのに——」

「初っ端に切れる手札はぜんぶ切ったんやが……それでも落ちんかったわ。こら、ワイらより向こうのタフさが一枚上手やっちゅう話やな」

血濡れの大ナタを肩に担いだリカードが、ライガーに乗って隣にやって来た。

白鯨の防御力が予想以上だったため、リカードは不満そうに鼻を鳴らす。

「あのカタさは相当やねんな。岩盤叩いとる感じやな。」

当たって見た感じ、物理的な攻撃はワイくらい馬鹿力かヴィルヘルムさんの剣技——或いは」

リカードがそこで言葉を区切ると、未だ白鯨の背で奮戦するヴィル

ヘルム——では無く。

ちょうど今、白鯨に剣を撃ち込み、青い爆発を引き起こした男を見た。彼は戦場を縦横無尽に走り回り、魔獣を狙撃する弓兵^{アーチャー}としての役割を十全に果たしていた。

「あの兄ちゃんがどう立ち回るか、にかかつとるな」

彼は戦場において、常に最適な位置から白鯨の体を的確に射抜いている。

「アーさん、『弓兵』としてそんなにすげえのか？」

「高々弓であの皮膚を貫くて、馬鹿げとるわ」

そもそもそれは、白鯨の硬さを考えれば異常なことであり。

「それに、どうやったたら白鯨の上に立つワイらの事が見えんねん」

アーチャーは討伐戦が開始してから、何本もの剣を矢として放っている。その剣は時には体を貫き、時には蒼い炎を上げて肌を焦がす。

もちろんリカードやヴィルヘルムが白鯨の背中に立っている時も同様に、だ。

その時は即座に立ち位置を変え、矢が貫通した先に彼らが居ないような位置に調整しながら射っていた。——それが異常なのだ。その空間把握能力は、目の善し悪しという次元を超えている。

無論、それは彼が『千里眼』或いは『鷹の目』と呼ばれる射撃に特化した技能を保持しているから出来る芸当である。

「あれはさすがにバケモンすぎんで、流石に」

「しかも地竜とかに乗ってるわけじゃねえしな……」

加えて、アーチャーの移動手段は地竜やライガーでなく自らの脚だった。

疲れを避けるためか、そもそも彼も人の身だからなのか。地竜やライガーよりも機動力は落ちるが——その運動量はあくまで人外クラス。

しかし広大なフィールドで、それはどれほど疲れるものなのか。そんな戦い方を続けていたら、パンクする未来はスバルでも見える。

「それにしてもアーさんの矢が偶に爆発してるんだけど、あれって魔法なのか？」

「いえ…少なくともあれはゴーア系の魔法ではありません」

先程の攻撃で燃え盛る蒼炎を見た。

レムの見解通り、アーチャーの扱う火炎はゴーアの延長線上には無いものだ。魔力の使い方も放出の仕方、そして火炎の色つまり温度も何もかもが異なる。

——それは『壊れた幻想^{ブロークンファンタズム}』と呼ばれる魔力の暴発だ。ヘラクレス級の英霊ならまだしも、並の英霊ならば相当量のダメージを与えられる。その威力は凄まじいものだが——白鯨は未だ尚耐えきっている。

その理由はアーチャーの投影した宝具のランクにあった。アーチャーは生前、魔術使いではあったがその根幹はあくまで多彩な芸に通じた凡夫。

BとAランク相当の宝具を矢継ぎ早に投影することは、彼の魔力量を考えても厳しいものがある上——常に鯨の背にて力闘しているヴイルヘルムや、戦場の人々をその爆発に巻き込む可能性が大きかった。故に、EとDランク相当の宝具を使い、範囲を小さめにしていくことで白鯨に致命傷には至っておらず。

「なーにが、魔法……いや魔術だっけ？の才能が無いのか教えて欲しいぜ」

しかし威力をかなり抑えているとはいえ、彼等にとつては未知なるもの。驚きも大きい、リカードは

「ま。あれが何なんか、分からんもんは考えても分からんやろ！」

そう言っただけで思考を切り替えた。

今重要なのは、アーチャーの技についての考察では無く白鯨を地に落とす戦術だ。

「けどな、あの兄ちゃんの一撃はどつちにしろ重要な」

「どつちにしてもつてのはどういうことだ？」

「ああ、そりゃ白鯨のタフさ考えたらわかることやな」

「さっき言った、物理攻撃があんまし効かないとか何とかってのと関係があるのか？」

彼らの攻撃に耐え、剣が体の中まで貫いているというのに未だ地に

落ちないのだから。白鯨の物理耐性は確かに埒外だろう。

「せやな。あの白い皮膚ごと斬ったりすりすんのはワイらしか無理やろうけど——」

「あ、その下の皮膚なら行けるってわけか」

リカードの言葉を聞き、空を浮かぶ鯨を見ると。

「……確かにその通りっばいな」

彼の言う通り、白鯨の焼かれた皮膚は黒ずんでいる。

一発目にぶち込んだレムの氷塊はあくまで物理的な攻撃の要素が強かった。魔法が関与しているのはマナからそれを生成し、発射する所まで。加えて氷は魔法で作られたものなので白鯨の皮膚では魔力を散らされ、そして氷自体は厚い皮膚に防がれる。

一方、アーチャーが放つ蒼炎や火属性の魔法は、白鯨の肌を直接焦がす。マナを散らす白い肌を焼き飛ばし、下皮を露出させられれば——それが反撃の契機になりうる。

「リカードさんとヴィルヘルムさんじゃなくても剣が、いやそれだけじゃなく魔法も届くってことか——！」

「そういうこっちゃ」

「ですがそれでは、それ迄戦況は動かない。そういうことですよね」

「せやな。そんな訳やから、それまでにワイらができるだけ余力削つとかな——」

「————」

その時、白鯨の声がこだました。それは威嚇でも威圧でもなく——

——痛みに唸る声。同時に兵員の声も、高らかに上がる。

その声につられて見れば、

「おおおおーヴィルヘルムさん、すげえ!!」

ヴィルヘルムが白鯨の右目を抉り取っているではないか。白鯨は痛みからか巨大な体を何度も何度も畝らせていた——が、鬼はそれを全く意に介さず。そのまま見事に眼球を切り離し、

「つと、これはまずいで——！」

鯨から取り出された黄色い球体共々、重力に従って落ちてゆくヴィルヘルム。それを白鯨の巨体が追隨していた。

このままでは、ヴィルヘルムは魔獣と激突し破壊的な衝撃を受けるか、或いはその口に収まることになってしまう。それは、何の加護も持たないヴィルヘルムにとつては十分致命傷になりうる。

空中は足場が無く、地上よりも身動きは不自由だ。ヴィルヘルムもその例に嵌る。当然剣を構えるがそれ以外に出来ることも無く。このままでは地面に到達するより早く、白鯨と接触することとなる。

「助けに行つたるー！」

ヴィルヘルムが今いる高さは地竜では到底届かない。しかしライガーなら或いは。

こうしている間も白鯨は自身の一部を持って行かれた怒りから、グングン速度を増してヴィルヘルムを追う。

リカードは急いでライガーを一度唸らせ、駆け出すも——その瞬間。

「————」

白鯨の横腹に絶大な蒼炎が吹き荒れ、魔獣は弾かれたように上空へ逃げた。

「————うおっ、すげえー！」

その爆炎は今までのそれより数段上の威力であり。鉄壁を誇っていた白鯨すら思わず引いてしまうほどだった。

その跡には皮膚すら残らず。傷から覗いていた肉が、その威力を物語っていた。その一撃は、ゴーア系最高魔法よりも凄まじい焼け跡を残した。

「こら、兄ちゃん頼りになるー！」

それを放つたのはアーチャーだ。見れば、天高い所へ逃げる白鯨を真つ直ぐ見ていた。

「————さてと。続き、やってくるわ。とりあえずヴィルヘルムさんらと連携してどうにか余力削るわ」

アーチャーの強力な一撃にリカードは獣らしく獰猛に笑って見せ、今度こそライガーを白鯨の元へ向かわせた。

現状、白鯨に物理攻撃をたたき込めるのは四人のみ。ヴィルヘルム、リカード、アーチャー。そしてここにいるレムも可能だろう。鉄

球でゴリ押しすれば、表皮を削れるはずだ。

「…今のままだと動けないか。やっぱレムの魔法は効かねえのか？」

「はい…残念だから。結局、あの肌になを散らされてダメージが通らない上、《アル・ヒューマ》未満の魔法ではそもそも火力不足です」
「くそ…レムの魔法だと相性が悪いのか」

スバルが歯ぎしりをして白鯨を見ると――

「お、おい。レム……見えるか？」

「はい。あれは…白鯨が…震えている？」

アーチャーの攻撃を喰らった白鯨は空高くに逃げ、そのまま降りてこなかった。まさかこの猛攻撃に尻込みでもして、このまま退散でもするのだろうか。

――そんな考えは当然甘かった。

「――総員、警戒せよツツ!!」

そんなことあるはずもない。

唐突に魔獣の身震いは止まり、直後、身体中のありとあらゆる所に無数の口が開く。

「――っつ、ー!」

「……っ。……レムにしっかりと捕まっていますか？」

そして街道に響く金切り声。白鯨のそれは、聞くだけで不快になるものだった。この数瞬後、クルシユの判断は極めて正しいものだったと皆が悟る。

「スバルくん、何が起きてても――」

「ああ…レムに命、託すぜ」

尤も、警戒をしたところでどうしようも無いのだが。

「……………」

スバルとレムの決意を掻き消すように発せられた白鯨の絶叫と共に、口という口から『霧』が吹き出して――。

世界は白に包まれた。

同時に始まる、白鯨討伐第二ラウンド。――難易度は飛躍的に、上がる。

* * *

魔獣の体から出た霧は白い巨体を外敵から隠し、そして敵の連携を根こそぎ奪う。

「――様子見が裏目に出たか」

別に白鯨を舐めていた訳ではなかった。

クルシユとヴィルヘルムが集めたという『魔法』使いから放たれる『魔法』の数々は、彼が元いた世界の魔術とは威力が格段に違った。

また剣鬼や傭兵団の奮戦もあり、アーチャーとて一度は落ちてくると踏んでいた――が、白鯨の耐久力は彼の予想を遥かに超える。魔獣であろうと何であろうと生物である以上、肉を焼かれ、体を貫かれ、断ち切られる痛みはあるはずだ。深手を負うはずだ。

しかし鯨は奇襲を全て耐えきって、その姿を濃霧へと隠した。そうなってしまったては十全に狙撃は出来ない。

流石は異世界の魔獣と言うべきか。こればかりは白鯨を称賛する他ない。

「さて次の一手はどうか」

騎乗をせずに戦場を駆け回るアーチャーは、ここらで一旦脚を休ませるのも選択肢の一つだと考えた。だが、恐らく次に来るのは霧を活

かした鯨の反撃。

——『霧の魔獣』。その名に相応しい本領が発揮されるのだ。

反射的な回避ができるようにアーチャーが身構えていると——
クルシユの命令が野に響いた。

「——総員、回避ツツ!!」

直後。

その声が聞こえた方から、悲鳴やら怒声やらが聞こえてきた。

「チツ——」

恐らく白鯨により襲撃されたのだろう。手助けに行くためそちらに向かおうとするも、それより早くこちらに向かつてくる幾つもの足音が聞こえた。

「——アーさん、無事だったのか!」

「む、スバル」

やってきたのは地竜を操縦するレムにしがみついたスバルだ。何やら、上と後方を警戒しながらアーチャーの方へ逃げて来た。

「何があつた?」

スバルの他にも数人が連なっている。

「ついに来たぜ、白鯨の反撃が」

「やはり、か。『霧』という自らの領分に我々を引きずり込んだのだから——それも当然だろう」

「アーさん、上には気をつけてくれ。『霧』が降ってくる」

スバル曰く、先程魔獣の体から出た霧とは違う攻撃手段だったのだと言う。逃げながら振り返り、その霧が吹き付けられた地面を見ると、そこには何も残っていないかったらしい。

「……なるほど。それは厄介だ」

「卿らも無事であつたか」

「クルシユさん——!」

さらに、クルシユも合流した。彼女に付き従い、ヴィルヘルムに集められた老兵達もいる。

「では、少し卿らは離れている——せえい!!」

クルシユが気合いと共に剣を数度振ると、視界を覆っていた霧が打

ち払われた。

彼女は『魔法』や加護を通じて『風』に精通しているのだ。なるほど、それを応用して充満する霧を払ったのだろう。

視界を確保すると老兵を集め、被害状況を聞いた。

「各隊、何人が呑まれた？」

「我が隊の隊員数は十二名。三人、足りませぬ」

「……誰がやられた」

「わかりませぬ……ッ！」

小隊長の一人がクルシユに応じるが、問に答えることが出来ず。しかしこのような意味のわからないやり取りが更に続いた。

「こちらは十四名、一名が脱落」

「我が隊は二名。同じく不明」

何人が欠けたかは分かるのに誰が欠けたかは分からない。それが白鯨の操る『霧』の本当に恐ろしい能力。

即ち——

「消滅型の——霧っ、」

スバルの言った通り、先程大地を潰した霧は存在ごと世界から人々を消す。消えた事実は残っても、その前後での変化は分からない。

「忘却の霧、か」

霧に呑まれたという彼らのことは、アーチャーの頭からも消えていた。恐ろしい力だ。

「被害は十七名……小隊が丸々一つ消えた形か。……これは痛いな」

クルシユが、隊が受けた被害に齒軋りしているのを見て。

ここで——アーチャーの中に一つの疑問が湧く。消失の霧という、人をこの世から消し飛ばす悪魔のような能力。

ところで白鯨から出る霧は、魔獣の体にあるマナが変質したものなのだという。そして、視界を閉ざしているこの霧も同じく白鯨が作り出したもの。そうであるなら——

「——っ、」

そこでスバルが撃ち抜かれたように顔を上げた。

「……スバルも気付いたか」

「スバル『も』ってことはアーさんは見抜いていたのか？」

それはアーチャーの思考に追いついた証。そこへ彼ら二人だけの会話にクルシユが疑問を投げる。

「何の話をしている？」

二人が目を合わせ、アーチャーが「君が話せ」と言わんばかりに顎をクイツと動かした。

「…なあ、クルシユさん。確かに消失の霧は脅威だよ。けど、この霧だって白鯨の体から出てきたもんだろ？」

「……何が、言いたい」

「この霧って本当に視界を遮るだけなのか？」

「ならば——」

スバルの言葉にクルシユはハツとさせられたようだ。

「なるほど、それは道理だ。白鯨の追撃も十分ありうるか。——」

「フェリス、霧払いの魔石の用意は？」

「いつでも。ご命令一つで」

霧で以てどうするかわからない以上、一秒でも早くそれを払っておくべきだ。——いや、べきだった。

「—————」

先程吹き出された消失の霧は確かに白鯨が打った最初の手だったろう。しかし四百年生きた魔獣の反撃は少しも始まってなど、いなかった。

もしもアーチャーかスバルがこの考えに至るのがもつと早かったのなら。或いは、視界確保の為に霧払いの魔石をもつと早く使っていたら。

——濃霧により、再び闇を得たりリーファウス街道に鯨の甲高い咆哮が鳴り響き。そして——狂気が伝染する。

察は当たったものの、それは最悪の効果だったというわけだ。

「おお：首トンって漫画の中でしか見たことなかったけど実際に出来る人いるのか……って、いやいや！そんな事じゃなくて！」

「君達にこれが一体何かわかるか？」

「精神に、直接……マナ酔いに似ていますが、もつと悪質な……精神の汚染に近いですッ」

パトラッシュの上に座るレムが、苦しい表情でアーチャーに答えた。

フィールドを埋め尽くすほどの霧と、加えて精神に直接干渉する力。——討伐隊にとつて絶大な被害と相成った。見渡す限り、幾つもの小隊が足を止め、自らを自らの手で傷つけている男らと、彼らを止めようとしている男達がいた。

「耐性のある奴とない奴がいるのか……俺はなにも感じねえけど」

「レムは少しだけでしたので……今、落ち着きます」

「アーさんは大丈夫なのか？」

「ふむ……対魔力はそれ程でも無いのだが、どうやら私も抵抗出来るらしい」

「良かった。ならとにかく、この人達をフェリスのところに連れて行って治して貰おう」

「了解した」

周りの精神汚染者は全員、アーチャーが手際良く気絶させた。そうすれば、これ以上自傷行為はできないはずだ。

遠くには、アーチャーのように被害者を魔法で眠らせているフェリスが見える。やはり、一旦この場を収めるためにはとりあえず気絶させるのが最善のようだ。

「動けるものは負傷者を大樹の根に！多少の実力行使はやむを得ん！」

濃霧の先で、姿は見えないがクルシユが指示を出す。

彼女の精神が汚染されていなければ指揮管理系統に問題あるまい。しかしその声にはクルシユの悔しさが滲んでいた。

もう少し早く霧払いの魔石を打ち上げていたら、結果は違っていた

かもしれないのだから。一瞬の判断ミスがこの惨状に繋がった。クルシユとしては、自分の落ち度だと考えるのも至極当然だろう。

そこでスバルの頭にリカードとヴィルヘルムの姿が浮かぶ。

主力であるあの二人まで精神汚染の被害に——いや、それよりも消失の霧に呑み込まれていたら。間違いなく戦線は崩壊する。

「レム：ヴィルヘルムさんとリカードさんのことは覚えているか？」

「？はい、覚えていますよ」

「ミミとヘータローのことは？」

「あの双子さんですよ？」

「そうか……なら、とりあえずは良かった」

レムが覚えているということは存在は消えていない。それが分かるだけで安心はできる。

先程消えた十七人のことを、理由は不明だがスバルだけは覚えていた。ならばヴィルヘルムとリカードのことを覚えているのが気付いたら自分一人だけ——そんなことも十二分にあり得ると思ひ、レムに確認したのだ。

「ナツキスバル、卿らも負傷者を運ぶのを手伝ってくれ！」

地竜に乗りながら、指揮官自ら負傷者を運ぶクルシユが近づいてきた。彼女が運ばなければならぬほどに、現在追い詰められているだろう。

「ヴィルヘルムさん達はどこにいるかは分かるか？」

「すまない。まだ把握はしていないが、恐らくあちらも被害が大きいはずだ。できれば早く合流したいのだが……」

「またも悔しそうに歯軋りするクルシユ。」

「では大樹に向かうぞ」

「ああ——」

スバルがクルシユに承諾しようとするも。

「——我々を全滅させるためには、次白鯨は何をするだろうか」

アーチャーは尊大に腕を組み、気絶した兵の肩を担いでいるスバルとクルシユに言った。

「私が白鯨なら、この混乱に乗じて追撃するだろうな」

「……」

「ツツ——総員、至急負傷者を運べ！」

生憎と、魔獣は議論をする時間を与えてくれないらしい。

霧の向こうから響く白鯨の声が聞こえてくる。白鯨までの距離は近い。数十メートルも無いのかもしれない。

「こういう事だ、受け入れろ小僧」

この期に及んでかからかっているのか、スバルを小僧と呼び、笑みを浮かべながらこの場を託せと言う男には——不思議と安心できた。

この男の背中に全てを任せればどうにかなるんじゃないか、そう思えた。

「ナツキスバル！事態は一刻を争う！！」

「分かってるって！レム、行くぞ」

「はい……ツツ！」

既にスバル達の横には負傷者を抱えた兵員が何人も歩いていった。いち早く彼らが大樹の元へ運んで、フェリスの魔法でどうにか打開せねばならない。

やっと全負傷者を気絶させ、運び出そうとしたそんな時に限って。いや、こんな時を狙って。

近づく影にレムが叫んだ。

「白鯨、来ますー！」

霧の中からまずは太い角が——続けて醜い魔獣の口が姿を現した。

「……ツツ、！！」

「白鯨だあああ！！」

「クソクソクソ！！」

仲間を背負った老兵も、地竜に乗った魔法使いも皆走り出した。しかし白鯨との差は僅か数メートル。この距離から霧を吹かれたら確実に消される。

「チイツ!!」

クルシュが一太刀浴びせるも魔獣の進撃は止まらず。白鯨にとつても勝機を前にして引くことがおかしいのだ。

「————」

こんな剣技効くものか。そう言いたげに一度嗤うと、その時には既に、何十人も一度に呑み込めそうな巨大な口には『霧』が充填されていた。

このままではクルシュ・スバル諸共全滅だ。それは避けられない運命だった。

この戦いの記憶すらこの世から消え、奮闘した彼らの存在すら人々の中から無くなるのだろうか。

——この場に神代聖杯戦争の英雄と戦い抜いた英雄がいなければの話、ではあるが。

「————」

「——なんだとツ!？」

その驚きは誰の声か。

クルシュの風の太刀に続いて飛び出した一筋の光。

閃き——。

その青い輝きに目をつぶった刹那の内に、鯨の巨体が後ろに下がり、再び霧へと消えた。

「スバル、^{しんがり}殿は私に任せろ。今の内に彼らを連れて行け！」

アーチャーが一人で対応することには反対だったスバルも、目の前の光景を見せられては納得する他無かった。

いつ間にか握っていた弓に、^{第二の矢}新たな剣を装填しながら叫ぶ。

「スバルくん、早く怪我人のお二人を乗せてください！あと二人くらいなら行けます！」

「……分かった。頼むぜ、パトラッシュユ！」

白鯨を霧へと押し戻し、アーチャーは二本目の矢も射出。同時に青い爆発が巻き起こり、一帯の霧が吹き飛んだ――。

その先にいる鯨は、鼻先の皮膚が全て吹き飛び、痛々しく肉が露出していた。しかし瞬時にその体は霧に包まれ、影となった。どうやら鯨は恒常的に霧を放出しているようだ。

「アーさん……頼んだぜ」

「なに、これしきのこと。なんてことは無い」

アーチャーは一度不敵に笑ってから霧に身を潜めた白鯨を追い、姿を消した。

理由や根拠は無いけれどあの男なら生きて帰ってくる――そんな気がする。

彼の背中がそう語っていたから。

「じゃあ行くこうぜ！」

「はいー」

「――」

スバルに呼応するようにパトラッシュユが短く吠え、走り出した。レムとスバルの他に二人を乗せて尚、速度はあまり落ちていない。大樹に行く分にはなんの問題もあるまい。

とりあえずはアーチャーのことを信じて、負傷者を大樹に届けるしかない。

今のところ、自分に白鯨を引き付けると言いながら、役割を果たせていない気がする。

これは仕方がないものがある。接近戦が多く、その為にスバルが立ち回れる場面が少ないのは事実だ。――しかしこの後、きっとその

機会があるはずだ。

今はまず、態勢を立て直すためにも彼らを治すことが先決だった。

▷▷ T o b e c o n t i n u e d

第五話

自傷によつて傷を負つた者を大樹の元へ送り、更なる被害を危惧して霧払いの魔石を打ち上げるより早く。そこへヴィルヘルムと『鉄の牙』の精鋭達が合流した。

彼らが迅速な行動ができたのは訳がある。分断され、深刻な被害が出た場合は大樹その元で落ち合うという話だったのだ。視界を閉ざす霧は恐ろしい。念には念を入れて打ち合わせることで、最低限の事態には対応できるのも確かだ。

魔石の効果で霧は薄い。地竜で走つても、先程と比べ見通しは断然良かった。

地竜で走つていて——そう言ったのは、スバルがヴィルヘルム・リカードを含めた十数人を連れてアーチャーの手助けに向かつている最中であるためだ。

合流したヴィルヘルム・『鉄の牙』の内、精神被害を受けていた者の数は少なかった。そもそもヴィルヘルムが行動を共にしていたのはリカードを含む『鉄の牙』の精鋭達。

精神汚染の霧に対する耐性の有無についての基準は謎ではあるが、ある程度推測できる。スバルという例外は外すが、アーチャー、クルシユ、ヴィルヘルムといった強者は耐性を持つていた。つまり、一定以上の強さを持つならば霧の効果は薄い傾向にあるようだ。

しかしあくまで、「傾向」としか言えない。レムとて一定以上の強者ではあるが、マナ酔いに似た症状が出ていた為だ。

それを考慮すると、『鉄の牙』の精鋭達の被害が少ないのは理に適つていた。

スバルはアーチャーの加勢に向かつてはいるが、かと言って負傷者達を守る人員も割かねばならない。敵は人々を記憶から消し去り、精神を狂わせる卑劣な魔獣。

白鯨がアーチャーという一人より先に、負傷者という群れを狙わない保証は無いのだ。故にスバルは『鉄の牙』やヴィルヘルムが声をかけて集めた老兵達全てを引き連れた訳ではない。連れているのは十数人のみだった。クルシユやミミ姉弟は負傷者のところに残っている。

幸い、彼らの傷自体は浅い。フェリスが精神汚染を解除することが出来さえすれば、きっと彼らもまた加勢に来てくれるはず。

——消えてしまった者に対する名誉を守ることは既にできない。ならば、せめて未来を見るべきだ。

過去を悔やむのはまだ早い。

敵は未だ健在なのだから。

樹から離れて白鯨の鳴き声も大きくなりつつある。アーチャーと戦ってる白鯨が近いのだろう。

そんな時——

「なあレム。初めからずっと、アーさんが空で戦ってるってあると思うか？」

スバルがレムに頼んでパトラツシュを止め、空——未だ霧に阻まれて月や星は見えないが——を見上げる。しかしその顔はこの戦が開幕した時と比べ、自信に満ちる顔では無く。

ヴィルヘルム達もスバルに合わせて、地竜を止めた。

「?…:ありえない話ではないと思います」

ヴィルヘルムが天高く浮遊する白鯨の背中で戦っていたことを思い返せば、別段おかしな話ではない。

しかしスバル達とて、無策に白鯨の元へ向かっている訳では無い。「そう言うてもなあ。ほんのついさっきまで、霧ん中から声聞こえとったやろ?今は聞こえとらんようやが」

彼らに進む道を示しているのは白鯨の鳴き声。アーチャーと戦っている時に唸るそれを頼りにここまで進んできた。そしてそれは、霧の向こうから聞こえてきていたのは確か。獣人であり、耳が利くりカードが言うのだからそれは間違いない。

今は聞こえないが、スバルが言うように、「初めからずっと」空高く戦っているという事は無いだろう。

しかし――

「でも、きつと白鯨は初めから上にいたんだ」

根拠は無い。確信もない。強いて言うなら、スバルは自分の感覚を信じたに過ぎない。

大樹から出立する際、事実霧の向こうからは鯨の音が聞こえてきていた。その為、その時は自分の感覚を”勘違い”だと断じた。

――だが、霧を進む中で常に鯨を空に感じ、加えてその位置は常に変わらず。

スバルは『魔女』の匂いがする特異存在。彼程強い匂いがするのは大罪司教くらいなもの。更には、魔獣を引きつける体質を持つ。

そんな彼の勘をただの勘違いとして処理してもいいのだろうか。アーチャーの元へ移動する中でスバルもそれを考えた。その感覚が正しいものだったと仮定したら――恐ろしい何かが起きている気がする。生半には打破出来ないような、何かが。

だからこそ彼等に言ったのだがしかし、根拠の無い仮定にヴィルヘルムが当然の疑問をぶつける。

「アーチャー殿と白鯨との戦場は初めから空――そうならば、我々が頼りにした声は何だったのでしょうか」

「それは――」

スバルの感覚に従うのならば、それが湧き出るのは道理。先程も言った通り、獣人の耳を頼りにここまで来たのだ。

事実スバルとて考えなかった訳ではなく。未だ、明確な答えを用意できていなかった為、自信なさげにレムに問うたのだが。

「――」

「――、――」

直後、凄まじい魔力の奔流。共に聞こえる男の声――なんと
言っているか、鮮明には聞き取れないが――と悲鳴にも近い唸り。

「上から何か来る――！」

誰かが叫んだ警告に対し、即座に回避行動を出来るよう全員が身構え――

「……まじ、かよ」

――霧の中で何が起きていたのか。

スバルがそれに答えを出すより早く、上方を覆う霧を裂いて白鯨が降ってきた――。

大地との激突により砂塵が巻き起こる。

「これは……」

ヴィルヘルムの絶句も無理はない。

――彼らの目の前には血に塗れた白鯨が微動だにせず倒れているのだ。息はしていないようだった。

「――アーチャー殿」

裂傷は百を超え、アーチャーが打ち込んだであろう爆撃のような攻撃によるものか、表皮の多くは消し飛んでいた。それだけでは無い。魔獣の至る所には剣が生えるように突き刺さっていた。頭には五つの大きな穴もある。

――その殆どがアーチャーによるものなのだろうか。

「こんな短い時間で白鯨を狩ったいうんか!？」

「――いや、まさか……そんなはずは……」

白鯨が討たれたという事実には彼らはざわめく。相手は先代・劍聖すら屠った魔獣だったのだ。

——ならば、それをものの数分で狩るアーチャーという男は一体何者なのか。

白鯨をアーチャーに任せて撤退してから大樹まではずぐに到着、同時にヴィルヘルム達と合流。即座にアーチャーの助力のために大樹の元を離れた。

どんなに多く見積もっても彼と別れてから五、六分しか経っていない。

「――」

「ヴィルヘルムさん……」

例えその男が正体不明の猛者で未知の魔法の使い手だったとしても——たった五分で狩られる程度の魔獣に最愛の妻は敗けたのか。

地竜から下り、鯨の死体を呆然と見続けるヴィルヘルム——そしてそんな彼の事情を理解しているスバルもまた、ヴィルヘルムを見る。スバルとて、更なる激闘の果てに討伐が成されるものだと思っていたが。蓋を開けば何ともまあ呆気ない幕切れだった。

その思い込みがいけなかった。

スバル達は失念していたが——霧は晴れていないのだ。

四百年という歳月を生きる魔獣の死体を前にして冷静になれ、というは無理なものだ。他の可能性を考えろ、と言う方が常識的ではない。

しかし事実として霧は未だ濃い。スバル風に言うのなら「ゲームつてのは、基本的にボスを倒せばフィールドにかかる効果は解除される」筈なのだ。

濃霧が掻き消えていないということ——即ち。

それをいち早く察知したのは、レムとリカードだ。

「スバルくん、しっかりと掴まってくださいッ!!」

「ヴィルヘルムさん、アカンで——」

レムの言葉と共にパトラッシュが急加速。踏み出す一步目から最高速度で危険区域を離脱。スバルもレムに言われて彼女の腰をしつかりと掴むが——初めのうちは『加護』の効果を発揮しないため、凄まじい向かい風がスバル達二人を地竜から叩き落とさんと吹き付ける。

また異変に気づいたりカードは、傍に立つヴィルヘルムを片手で掴み、同時にライガーを走らせる。男二人は少しきついが——そんなことを言ってる暇は無かった。ましてヴィルヘルムが地竜に乗れる猶予も無く。

スバル達にとっては地に伏す鯨により死界となっていた、魔獣の躰の向こう側。そこから霧が吹き付けた。

「——なッツ?!? 白鯨は倒されたんじゃないやなかったのかよ!?!」

それは紛れもなく白鯨が攻撃手段として用いる消滅の霧に他ならない。スバルは振り返るほどの余裕は無いが、おそらくそれは白鯨を地面ごと抉りとったことだろう。

それだけではない。霧を回避できずに呑み込まれた二、三人の悲鳴が後から聞こえる。

「——」

霧の破壊は終わらなかった。呑み込むのみならず、あまりに強く吹き付けた故に、その余波もまた強力。対象の消滅効果はないものの、単純に風速が大きい。

スバル達は地竜ごと迫る突風に吹き飛ばされ、土煙に飲み込まれた。

「一体何が……」

白鯨はアーチャーの手によって倒されたのでは無かったのか。先

程まで居たではないか、息の無い魔獣が目の前に。

しかし白鯨による恐怖はまだ終わっていないかったのだ――。

「スバルくん、大丈夫ですか?」

「レム、ああ――っつ!?!」

その事実と、地面に落ちた衝撃により混乱する頭で、側に横たわるレムに答えると――スバルの視界の奥で、

「――」

白鯨が現れる。

「――避けるオオオオオオ!!」

口を大きく開き、地面を抉り取りながら全てを喰らう姿はまさに獣。

その先には――

「ヴィルへ――」

一度はリカードに助けられ、霧は逃れたものの。余波の爆発によりリカードから振り落とされ、地面に転がったヴィルヘルムがいた。

「――」

「――あ」

一瞬だった。

彼の名を、満足に呼ぶ時間も無いままに鯨の口に呑み込まれ、鯨は霧へと消えた。

「――」

白鯨の骸は^{ダミー}囚^ミだったのだろうか。答えはわからない。未だ、何が起きているのかも掴めていない。

しかし、霧へと消えた魔獣が嗤っていたことだけはスバルでも分かった。

――そこへ不意に、月明かりが差した。

霧が晴れ、視界が開けた。そう思つて上を見れば――空に浮かぶ四つの影。

「――」
「――」
「――」
「――」

それらは泳ぐように天を飛ぶが、決して美しさを感じるものではなく。原因は獣の醜怪な姿に在り。

魔獣の名は――白鯨。

たった今、倒されたと思い込んでいた魔獣の名だ。いや事実、アーチャーの手によって倒されたのだろう。空飛ぶ白鯨の内の一匹でしか無かった――という但し書きはつくが。

絶望に包まれ始まる白鯨討伐第三ラウンド。――終局は近い。

▷▷T o b e c o n t i n u e d

第六話

視界がすべて白に染まるリーファウス街道で、

「——ふんッ！」

「——、——」

赤い外套を纏う男が、血と踊る。

彼が足場にするのは巨大な魔獣——白鯨の背だ。男の武器はその手に握る一対の剣と、空中に浮かべる数多の剣気。振るう一太刀一太刀が確かに魔獣の生命を削り、大剣を放つごとに”死”が白鯨に歩み寄る。

——つまるところ、この男は、アーチャー四世紀に渡り世界に畏れられてきた魔獣を圧倒していた。

その証拠に白鯨は空を泳ぐ余力も残っておらず。地に伏し、アーチャーの剣戟に抵抗することすら出来ていない。

彼にとって悪い方向に働いた要因は一つだけ。白鯨という魔獣が”怪異”にカウントされなかったという点のみだ。

オリジナルの干将・莫耶は”怪異”に対して極めて相性が良い。第四次聖杯戦争においてキャスタークラスのサーヴァントが召喚した大海魔。おぞましい見た目を持ち、無限の再生をする魔物。それを倒すには、対城宝具或いは対界宝具という、絶大な一撃の元に細胞ごと消し去る他なかった。

しかし干将・莫耶を用いたならば。正面からそれに挑み、叩き切ったことだろう。

それほど”怪異”と相性が良い干将・莫耶を愛用するアーチャー。彼にとって、元いた世界には存在しなかった魔獣というものが、”怪異”として認識されていれば、もっと早くカタが付いていただろう。「いやしかし、はつきり言って失望したぞ」

だが零れたのは不服の一言。スバル達と別れて白鯨を迎撃したものの。魔獣は存外脆かった。

「まあ獣如きに語っても無意味なのは分かっているのだがね」

「——、——」

満身創痍。息も途切れ途切れの『白鯨』。

だからこそ謎は残る。正直この程度の耐久力ならば、先の奇襲で落ちないはずが無かった。剣鬼の猛攻や、低ランクとは言え宝具に内包された魔力の暴発も耐えているのだ。

何故あの時は埒外の耐久を示し、今はここまで脆いのか。

「ふむ……根拠も無い。こればかりは考えても仕方は無い、か」

何であれ、今ここでこの鯨を殺さなければならぬことは変わらない。この鯨の討伐は即ち、世界の安寧に繋がる。

白鯨の息は絶える寸前。あと数撃でカタがつく。

アーチャーは無詠唱で二メートル程の巨大な剣を数本投影、それに合わせて手に持つ剣を振り上げ——。

「————」

しかし、そうはさせまいと白鯨が足掻く。それは命の灯火が消える寸前の抗い。

鯨が跳ね上がる光景は、広大な海においてごく稀に見られる。それは神秘的とも言われるが、この場合、そんなものは微塵も感じさせることは無かった。

白鯨は、今までのどんな動きよりも疾く天に昇る。

「——だが、それでどうする」

最もそんな抵抗は彼にとって、白鯨を殺す上で誤差と言っても変わらない。

今更、空に逃げたところで一体どうなると言うのだ。どの道あと少しで終わる。……とは言え、霧の向こうに隠れられれば面倒なのもまた事実。

——ならば、夜の中天にてケリをつけるまで。

「トリスオン
投影開始」

詠唱を口にすると共に、手には大剣が。夫婦剣を粒子に変えて、大剣を白鯨の背に突き刺す。アーチャーはそれを然と握り、地面と垂直なはずである、天に昇る白鯨の背に立っていた。

「――」

痛みからか、鯨は唸る。しかし速度は落とさない。
そして――アーチャーを振り落とす気も無いようだが

それは酷い違和感そのものだった。

何故、白鯨は天に逃げた？生への執着に起因するならば、アーチャーを振り払うことは必要不可欠なはずなのに。

アーチャーを置き去りにして逃げ帰り、生き残ろうとした為？――その可能性はある。

あえて退いて大勢を立て直し、報復する為？――それも、あるかも知れない。

答えるなら”本能”。

そもそも白鯨は、聡明な類の生物ではあるまい。そもそもアーチャーが背中に付いてくるか否か。この魔獣如きの知能では判断出来ない。

現実としてはそうだったが、白鯨を弓で撃ち落とすべく、あえて地上に残る可能性だつてあった。

いや――だからこそ、この魔獣はそれを逆手にとったのかも知れない。もしアーチャーが地上に残ったなら、死力を尽くして逃げ切れれば良いのだ。

そしてアーチャーが付いてきたのなら。

「呼び寄せた……？」

何も独力で迎撃する必要は無く。もし他にも天を泳ぐ魔獣がいるのなら、話は別だ。

白鯨が霧を抜けたその先でアーチャーが目にしたのは――

月の輪郭をなぞるように泳ぐ二体の白鯨。

その少し下を飛ぶ一体の白鯨。

そして、アーチャーと瀕死の魔獣に向かって真っ直ぐ泳ぐ白鯨。

——計、四体の白鯨だ。

アーチャーにとっても、白鯨が複数体で行動するなんて初耳であった。つまり事前の擦り合わせにそんな話は出ていないということであり、それ故その事実を知る者はこの世にいないと即座に推察した。

「三大魔獣である白鯨が群れを成す」——そんな情報を知る者がいたり、或いはその者が文献などに残せば。それは周知のものであるはずなのだ。

だが討伐隊の誰も知らなかった。十四年に渡って白鯨を追い続けたヴェルヘルムでさえだ。

その理由として、過去に“これ”を見た者は全て白鯨に消されたことが考えられる。だからこそ伝えられることがなかったのだろうが——そこから加えて推測される「白鯨は今、間違いなく追い詰められている」という事実。

先代・剣聖を筆頭に組まれたかつての討伐隊ですら、この群れとは相対しなかったのだから。

「————」
「————」
「チツ————」
そうこう考えているうちに、アーチャーに脅威が迫る。一瞬、大きな影が覆いかぶさり——

「チツ————」
その影——即ち、第二の白鯨。額に生える一角にてアーチャーを貫かんと迫っていたのだ。逃げる白鯨の最期の抵抗は、生き残る為でもあり、実は半ば道ずれにアーチャーを仕留めるためでもあったという訳だ。一見矛盾しているようで裏腹な行動は、アーチャーの行動次第でどちらかの目的を果たせる。

当然アーチャーは無抵抗で殺られる気は無く。白鯨の背から大きく飛び退いて、

「トレスオン
投影開始」

投影した干将・莫耶を胸の前で交差。

そして——角の鋭利な先端に合わせて見事防ぐ。衝撃でジリジリと火花が散り、それは夫婦剣にも軽く罅が入るほどだった。

「なるほど、仲間意識はあるのか」

「————」

その威力を他所に、アーチャーは冷静に分析しながら、白鯨の背中から離脱。体は重力に引かれて大地に向かって放物運動をする。

角は優に防げたものの、結果としてアーチャーは瀕死の白鯨から大きく遠ざけられた。

「————」

鯨が、嗤う。結局貴様はトドメは刺すことができなかつたな、と。

彼が白鯨の一体を追い詰めたのは、間違いなく、彼の剣とその物量による。ただ、剣技というのは接近戦でしか使われることはない。

ならば距離ができた瀕死の白鯨は、逃げ切れるのか。

「勘違いするなよ、獣風情が」

しかし——彼は元より剣で戦う者では無い。

距離ができた時こそが、彼の本分だ。

いつの間にか、手には弓と同時に装填された十の剣が収まっている。アーチャーのすぐ背後には霧が充満している感覚があった。再びそこに沈めば、また白鯨を目視出来なくなるだろう。再び霧の海に届くまで残り三秒弱。

——十分すぎる時間だ。

「落ちろ」

短く一言言うと、魔獣まじゅうに向けて正確に照準を合わせ——十の剣を射出。

「————」

内五本が瀕死の白鯨の頭蓋を射抜き殺す。鯨は断末魔の醜い声を上げ、力が抜けたように濃霧の海に落ち落ちて逝った。

しかし、そうなると残る五本はどこへ。彼ともあろう者が外したのか——？

——否。

外したのではない。狙ったのが違っただけのこと。

「————」

「————」

見下すように。優位を確保していることにほくそ笑むように——
——悠々と天を泳ぐ魔獣を射ったのだ。

矢は白鯨の身体を貫き、ダメージに耐えかねたように高度を下げたが、

「ふん、堪こらえたか」

脅威的な耐久を見せた白鯨はここでもアーチャーの一撃を耐える。
とは言え、彼は難なく白鯨の一体を狩った。屍が力無く落下する姿を見た刹那の後、視界が——いや、全身が白に染まる。霧に包まれたのだ。

アーチャーはそれを抵抗すること無く受け入れ、そのまま着地体勢に入った。

* * *

「うそ……だろ」

「あ、ああ……あああ。もう終わりだ……」

「どうしろって言うんだよ!!」

「なん……だよ……」

少し霧の晴れたリーファウス街道に響く重なる声を聞いて、兵の一人は信じられないといった顔をし。一人は絶望から武器を落とし。一人は行き場のない怒り、或いは諦めという感情が芽生える。

夜払いの魔石を使用することで見えた白鯨の姿は彼らを萎縮させたが——今はそれ以上の恐怖を覚えさせる。

視界を確保するために霧払いの魔石を使ったのは良い。しかし、だからこそ前例と同様に視界確保する故、白鯨の姿も見えるのだ。

確認できるのは——四つの魚影。

ゆっくりと、ゆっくりと泳ぐ姿には嫌悪感と恐怖しかない。その異形は人々の足を凍らせる。物理的ではない。恐怖ゆえの竦みだ。

あの一体を落とそうとすることにどれだけの力を結集したというのか。それで尚、地に落とせなかったのだ——その魔獣が、四体。兵士達の心情は「絶望」ただ一色に染まった。

中には諦めが微塵もないものは当然いる。ミミヤヘータロー、クルシュやフェリスらがそれにあたる。

しかし消滅の霧や精神汚染のことを考えると、こちらの兵力は開始当初の三分の二から二分の一程度。対して相手は四倍。

「どこに勝ち目があるんだよう……」

一人の兵士が吐いた弱音^{それ}は、この場にいる大半の代弁であり。数十分前の士気は完全に消え失せた。

クルシュもまた頭を発火させる勢いで頭を回した。ああでもない、こうでもない。この状況を打開するにはどうすべきか——。

そこへ一筋の光が差す。

「む、ここにいたか」

不意にクルシユに声がかかった。

「……………卿か」

浴びた返り血はあれど、見たところ流血すらないアーチャーだ。クルシユは考えに更けていた為、彼が近づいてきたことに気付かなかったか——いや、待て。

（——あの魔獣と対峙して尚、傷一つ負わないのか!?)

クルシユは全身にある種の恐怖を感じた。

この男は逃げ帰ってきたのか……と一瞬考えるも、然しそのような性格では無いだろう。それに、それでは浴びた返り血の説明がつかない。

「……………一つ、問を質したい」

「構わないが……………今、悠長に話している時間はあるのかね」

「重大なことだ——卿は、あの白鯨をどうした？」

彼が逃げ帰ってきたという発想故の質問ではない。聞きたいのはその実力にて、かの魔獣にどう対抗したのかというただ一点。

「ああ、あの鯨は落としたさ」

しかし予想を遥かに超える返答に、

「——」

「……………え？」

「いま、なんて」

驚く声は誰のものか。

アーチャーの発言が聞こえた者はざわめく。なんと……………言ったのか。聞き違いでは無いのか、と。

彼がもう一度言うのなら。理不尽な現状を前にしても、これだけは聴き逃してはならない——「絶望」に沈む者もまた、そこから引き返し、クルシユとアーチャーの会話に耳を傾けた。

「……………それはこの短時間で……………ということか？」

「そうだとやっている。あの魔獣は四体では無く、私が落とした奴も含めれば本来五体だったのだろうか」

今度こそ、全員に確かに聞こえた。

この素性の知れぬ男は、白鯨を殺したのだ——！

その事実はクルシユに勝利への最適解を与え。そしてつい数秒前まで「絶望」にたたき落とされていた者は皆、確かな「希望」を見る。

白鯨を破るためには、改めてアーチャーの力が必要だ——いや、今思えば彼らが勝手に絶望していただけだったのかも知れない。初めからアーチャーという手札は手の内にあっただけだから。

「もう一度、頼む。力を貸してはくれないか」

だからこそクルシユは彼の目をしかと見て、頭を下げた。——今なら確信を持って言える。アーチャーは、間違いなく最強のカードだ。

「君はおかしなことを言う。元より其のつもりだと言っているだろう」

「——」

しかしそんな彼から返ってきたのは軽い笑みと、当然だと言わんばかりの肯定。そんなこと、初めて彼と話した時に分かっていた筈だった。ああこのような馬鹿がいるのだな、と。

「とは言え、この状況に陥ったのは私の責でもある。初めから様子見に徹することが無ければ、こうなる事も無かつただろう」

申し訳無さげに少し顔を俯けるアーチャー。あの弓の精度と威力で“様子見”だったのか——そんな驚きも彼らにはあったのだが。

「飲み込ませるなあああ——！！」

唐突にスバルの叫び声が平原に轟いた。それは今も彼らが戦っている証左。

——そうだ。まだ何も終わっていない。いい意味でも、悪い意味でも。

しかしはつきりと「希望」は見えた。絶望に浸り、命を投げ出すにはまだ早すぎる。最後の最後まで抗おう——まだ、何も終わっていないのだから。

▷▷ T o b e c o n t i n u e d

第七話

「ー、ー」

「ツッ！」

苦痛に吼える白鯨。その背には鉄球で鯨の肉を抉るレムと、大鉈を振りかざし皮膚ごと肉を断ち斬るリカードがいた。

両者の表情は共に鬼気迫るものがあるが。それもそのはず。その白鯨の腹の中には、ヴィルヘルム・ヴァン・アストレアが収まっているからだ。

最も、白鯨に食べられたというのも、ほんの少し前の出来事だ。すり鉢の如き白鯨の歯に、彼の頭が磨り潰されていなければ十分に救出できる可能性はある。

いや。そもそもスバル以外の者達がヴィルヘルムのことを覚えていることこそが、生存の証とも言える。剣鬼はまだ死んでいない。だからこそ、事態は一刻を争うのだ。

「飲み込ませるなあああ!!」

絶望的な状況には変わりないが、諦めるのは早すぎる。

「諦めるのは似合わね——っつ!!俺もみんなも、誰にでも!!」

スバルにとつても、万人にとつても。

「諦め」という感情は、到底受け入れられるようなものではないのだから——。

* * *

少年の怒声が霧に包まれた戦場に木霊した。

アーチャーという男から与えられた希望と、明らかにこの戦場において最弱であるスバルが未だ諦めていないという事実。それが討伐隊の彼らを再び奮い立たせる。——こんな所で膝を折っている場合では無い、と。

スバルだけならば、彼らはここまでの顔をしなかつただろう。直前に心を染める絶望が希望にひっくり返る情報を知り、若干の余裕が出来たからこそなのだ。恐らくアーチャーが居なければ、スバル達の奮闘を正常に認識することすらできなかつたはずだ。

「……ほう。存外に頼もしい言葉を言うのだな」

しかし——例えそうだとしても。スバルの言葉に勇気付けられた者達が多くいるのは確かな訳で。

少年の言葉を聞いて軽く笑みを浮かべたアーチャー。彼は指揮官であるクルシユを、そして討伐隊の者達を一瞥して問を投げた。

「さて、私は行くが……君達はどうする?」

「行く」——とは、つまりヴィルヘルム救出に、である。即ちそれは白鯨討伐の継続を意味するところであり。

アーチャーは、クルシユと一度は折れた討伐隊全員に問うたのだ。

白鯨ともう一度戦う覚悟を。四百年に渡り人間を消滅させてきた忌々しい魔獣を落とす覚悟を。

何度も痛みにも暴れる白鯨。白き鯨にとって痒い程度の攻撃もあれば、悶絶するに至る苦痛も時折与えられる。

「——、——」

「リカードさん、一旦下がります」

「おう、ワイはもう少し粘るわ!」

そんな暴れる白鯨の背に立つことは出来ないと、レムはこれ以上危険だと判断して背中から飛び降りた。

リカードならばライガーに乗っているため、容易に着地できる。一方レムは身体能力に長けた鬼族と言えど、高所から生身で落ちれば無傷で済むはずはない。かと言って策もなしに飛び降りたのかといえれば、そういう訳ではなく——

「スバルくん——っ!」

「つと」

パトラッシュユが上手く落下地点に飛び込み、スバルが見事にレムを包み込む。スバルが衝撃を受け止めたことでレムの負傷はない。

依然、スバルは逃走を続けて白鯨がスバルを追う。

「……………馳走様です」

「何言ってるの！ とりあえずお疲れ。どうだ？」

「奇襲に耐えきっていたのである程度は想像していましたが……………やはり硬いです。レムとリカードさんだけでは時間がかかるかも知れません」

魔法やヴィルヘルムによる斬撃、加えて低ランクだったとは言え、アーチャーの壊れた幻想プロレクンファンタズムをすらも耐えきった白鯨。レムが言う通り、やはり一筋縄では行かないようだ。

白鯨は手負いとなっても埒外の耐久力は健在のようで。ヴィルヘルムをいち早く救出したい反面、打開策が無かったのも事実だった。直後、爆音が響く。

「なんだ!?!」

スバルが驚いて見ると、中空を漂っていた白鯨——天高く泳ぐ二体、そしてヴィルヘルムを呑み込んだ白鯨では無い——に撃ち込まれる数多あまたの魔法弾。魔獣の皮膚は火炎で焼かれ、巨大な岩で形成された槍で骨肉を貫かれ。痛みにも悶絶する悲鳴が、スバルの耳にもはつきり聞こえた。

攻撃を仕掛けたのは勿論。

「——総員、撃て!!」

女傑の号令と共に再び白鯨は業火に包まれた。

白鯨を落とさんと魔法を撃ち続けているのは『鉄の牙』の精鋭達だ。クルシユのそばには弓を射るアーチャーも立っていた。

傭兵団である『鉄の牙』は、今は総括であるクルシユの号令に合わせでありつたけの魔法を白鯨に叩き込む。一度地に落とせば、ヴィルヘルムが集めた老兵達もまた心強い戦力となるだろう。

「おお、やつとるなあー!」

リカードもそれには感嘆した。爆炎で霧が吹き飛ぶほどの光景に。

『鉄の牙』副団長の二人も、華奢な身体ながら、そのような幼い風貌からは考えつかないほどの咆哮を叩き込む。

見て分かる通り、彼らの目的はヴィルヘルム救出ではない。寧ろ彼を食べていない、別の白鯨を攻撃している。

一刻を争う救出ではあるが、何故そうしたかと言えば単純に「危険だから」だ。仮にヴィルヘルムを腹に収めた白鯨を攻撃して、その衝撃でヴィルヘルムまでに危害が及べば、それこそ主客が入れ替わるというもの。

「頼もしいぜ——って、うおっ!!」

「回避しますー!」

とは言え、余所見は禁物。

逃げたレムを、そして『魔女の残り香』を存分に香らせるスバルに對して白鯨は追撃を加えてきた。頭に生やす巨大な一角の根元付近から、狙撃するかのように『消滅の霧』が噴き出してレムとスバルを狙ったのだ。

しかしそれはスバルの思惑通りであり。『魔女の残り香』に惹き付けられる白鯨を引き寄せて、ヴィルヘルムを食べた白鯨を空へに逃がさない算段なのだ。

「余裕が出来れば、もう一度白鯨へ攻撃しに戻りますっ」

「そんな隙、今んとこ無いけどな……っ!」

パトラッシュの手綱は既にスバルからレムに手渡されており、彼女とパトラッシュがいち早く危険を察知して華麗に回避したものの。『消滅の霧』が着弾した地面は綺麗に抉れており、スバル達に直撃していたらどうなっていたか。攻守双方において、今も尚白鯨は脅威ではない。

「……レム、回避は完全に任せられるか？俺は白鯨が増えた理由を考えたいんだ」

「分かりました。しっかりレムに掴まっついてくださいね？」

「おう」

白鯨に一度だけでなく何度も霧で狙撃されるが、だからこそスバルは回避をレムに任せた。スバルは彼女に全てを預け、今やるべきこと

をやり、レムもまたスバルに対して思考に没頭して欲しいと動く。
スバルが「今すべきこと」とは即ち、白鯨が増えた原因究明だ。確
実に何かカラクリが存在しているはず。元より五体いたのでは前提
に合わない。恐らく原因を突き止めさえすれば、再び局面は大きく変
わる。

クルシユ達が白鯨落としに全戦力をつぎ込んでいる中、スバルだけ
は加勢できないほどに非力だ。彼の参戦は竜巻に飛び込む仔犬と同
格。——ならば、彼の全意識は思考に注ぎ込むべきである。回避は
レムに任せ、そして自身はいち早く白鯨が増えた謎を解き明かそう、
と。

「考えろ……」

全幅の信頼を寄せたレムに身を任せ、回避に揺られる体を他所にス
バルは思考の海に沈んだ。

パトラツシユに乗るのが一人だったら。或いは二人だとしても、レ
ムでは無かったら。スバルはここまで深く考えられなかっただろう。

——明らかに不可解な点はある。それこそ、十四年に渡って白鯨
を追いかけていたヴィルヘルムが、そんな情報を見落とすことがある
のだろうか。僅かでも「白鯨は複数個体で行動する」という類の情報
が流れていれば、彼はそれを確かに掴んでいただろう。

(どうして急に三体に増えた?……なにか取っ掛りが掴めれば……)

「スバルくん、身体を傾けてくださいッッ!」

「——え?」

と、その時。レムが切羽詰まった声で叫んだ。後ろを振り向くと、
白鯨がその巨大な口に『消滅の霧』を装填している、そのまま放たれ
れば、間違いなくスバル達が吞まれる——そのような軌道だ。

拙い。拙い。拙い。

レムも咄嗟の判断でパトラツシユに指示を出して直角に曲がる。
最短距離で霧の軌道からの離脱を図るが——数秒足りない。スバ
ルもレムも焦燥が極まる——。

しかしその数秒を、

「ハ——ッッ!!」

リカードが稼ぐ。

「ー、ー」

「ハハハッ！余所見すんなや!!」

ミミとヘータローのような咆哮を真上から白鯨の脳天に叩き込む。しかしその威力は彼らよりも強烈で。白鯨はあまりの威力に強制的に口を閉じることとなり、その反動で大地に叩きつけられる結果となった。

彼が放つ咆哮とは、ミミとヘータローが放つそのオリジナルだ。元はと言えばリカードが元祖なのだ——と、彼は主張している。威力は言わずもがな、ではあるのだが当然デメリットもある。

一つ目は、ミミとヘータローは二人で放つ咆哮をリカードは一人で放つ。つまり身体への負担が大きいのだ。

「あー!!だんちよー、また真似した!ミミとヘータローの技、真似すんなー!」

「何言つとんのや!ワイのや言うとするやろが!」

二つ目はミミも自分でその技を元祖を主張しているため……たまたにモメる。他の白鯨を攻撃していたミミに遠くから抗議の声が飛んで来るほどだ。それが可愛らしいのだが……。

「はあ……助かった。……それにしてもリカードさん、すげえな」

だが安堵もつかの間。リカードの攻撃に弾かれて地面に激突した白鯨は、一度空へと退くことを選択した。スバルの追撃から一転、頭を天に向けて高度を急上昇。

それはリカードの奮戦に耐えかねたことと——同時にヴィルヘルム救出が遅れることも意味する。

「うおっ——」

リカードは白鯨の背に立っていたわけだから、彼は落ちるように滑り降りた。ライガーに指示を出し、巧みに降りることで衝突の衝撃は無かったが。

「スバルくん!」

「ああ……ここで逃がしちや結局何も変わんねえぞ……!」

低空にいれば、まだリカードとレム次第で救出の可能性は高まる。

しかし逃げられたならば——。それだけは防がなければならない。

「レム、耳を塞ぐぞ」

「はいっ」

要は白鯨を逃がさなければ良い。何も武力で落とす必要は無い——と、なればスバルの特性を活かして昇ろうとする白鯨をもう一度引き付ければ良い。

勿論、レムには耳を塞いでもらう。彼女は手綱を握っているため、スバルの手が塞ぐことにはなるが。

当然リスクもある。強力な『魔女の残り香』に惹かれてスバルの元に飛んでくる白鯨がその一体だけでは済まない可能性が出てくるのだ。同じく中空でクルシュ達と戦闘中の白鯨すらもスバルに目を向けるかもしれない。無力なスバルと二体の白鯨という明確な危険^{リスク}。

然し——

「そんな危険^{リスク}、初めから背負ってなきやこんなところにいねえよ!!——

——俺は、『死にも——」

スバルの言葉は途切れ——直後、それは現れた。

『愛してる』

耳元で囁きかけられる、弱々しい小さな細かい声。或いは何処かで聞いたことがあるような、そんな声。

どこか恐怖を感じさせるような黒い腕が見え隠れする中、聞こえてくるその声には熱が込められている。その熱はスバルの目の端に涙を浮かばせるような、そんな衝動を与える。

不気味なのに抱きしめたい。

奇妙なのに愛おしい——。

そんな非現実がスバルを埋め尽くすも、次の瞬間には、

「——戻った」

スバルの意識は覚醒する。

寸前までスバルを支配していたあの感情は消え失せて、それがどんなものだったのかすら思い出せなくなる。ただ心臓を握られるような激痛が訪れなかったという感覚と――

「レム、どうだ。俺から魔女の臭いは？」

「はい！臭いです！」

「狙い通りだけど、それ酷くね!？」

強烈な『魔女の残り香』だけが残り――。

「――！！！」

「――！！！」

空気を揺らし高く、高く、高く吠える二体の白鯨が、体の向きをスバルの方に変え。

「来た来た来た――ああ!!」

「――っ」

霧の中を泳ぎながら、ゆっくりと巨体を進め始めた。

▷▷To be continued

第八話

スバルに向けて舵を切った二体の白鯨。範囲外だった為か、はるか天高くから戦場を見下ろす二体の白鯨は降りてこなかったが。

「ワ——」「ハ——」

「アルゴア！」

ここで運が良いことにスバルがリスクだと考えたそれは、実は好機だったのだ。

白鯨が本能的にスバルの方を向いたというのは、裏を返せば現在進行形で戦っていた彼らに対して背を向けたということであり——それは討伐隊にとっては隙でしかない。

逃げたはずの白鯨は弾かれたように方向転換をしてから、角の根元から『消滅の霧』にてスバル達を狙撃しながら迫ってきた。先程の焼き直しのように。

「——、——」

ヴィルヘルムを腹に収めた白鯨を引き付けて戦場を駆けるパトラッシュユ。と、そこへリカードが寄ってくる。

「おう兄ちゃん、よう低空こっちに白鯨を戻したな」

「秘策……って訳でも無いけど、そんな感じのを使っただよ。リカードさん、もう一回白鯨に突撃頼めるか？あと少しで何か掴めそうなんだよ」

「おう、任せとき。ほんならその嬢ちゃん、借りてつてもええか？一人より二人の方がええやろ？」

「分かった。……レム、もう一度行けるか？」

レムが白鯨に攻撃する手段は基本的に肉弾戦一択。マナの消費量は極力減らそうと、背の上では魔法もそこまで使わない。

白鯨という岩肌をよじ登り、鉄球で削岩するというのはタフなことだ。全身にある、霧が溢れ出る『口』を潰しながら。かつレムはヴィルヘルム救出の為に、逆スプリンクラーとでも呼べるような血飛沫を

上げさせるほど、力強く鉄球で白鯨の肉を抉る——覚悟は必要だった。

一度それを経験したからこそ寧ろ。

「分かりました」

しかしレムはそれを即断する。実を言うと体力の消耗はかなりある。鬼族と言えど、少女にとっては余りの重労働だった。

「ほんなら頼むわ……あ?」

一旦^{ふたて}二手に分かれてから白鯨にまた。そして再び彼らが攻め立てる中、自分はパトラツシユと鼻先を駆け回って引きつけよう。そう意気込んでいた三人だが——リカードがなにかに気づいたように空を見上げる。

直後のことだ。余りに荒唐無稽であり現実感の無いような光景を目にする。

「——、——」

「え?」

それは一瞬のことだった。

「何か」が空から降ってきた。まるで赤い彗星かと思わせるほどの速度で。

それは、白鯨の首元に着弾するや否や——白鯨の首を横挽きするように、いや、一思いに掻き切るように。

兎に角、白鯨の首が飛んだのだ。

証拠に、魔獣の目は虚空をさ迷い。切れ口からは洪水のように、血が溢れ出ていた。

「え——ええええええ!」

「……っ」

「嘘やろ……?」

スバルはそれはもう興奮気味に叫んで。レムとリカードは口を大きく開けてただただ呆然として。声すら出すことが出来なかった。

或いは一番信じられなかったのは、白鯨本体かもしれない。鬼と獣人の猛攻がいくら激しくても「痒い」「痛い」「痒い」と軽く受け流していた白鯨だったが——一閃。たったそれだけで自身の首が撥ねられることとなるとは、まさか思うまい。

「まさかここまでとはな……」

「クルシユさん……!」

いつの間にか横にいたクルシユもまた感嘆を漏らす。まさかここまで圧倒的とは——と。スバルもその一言で完全に立役者が誰かを理解した。

「——アーさん!」

手に握る黒白こくびやくの双剣の下に、白鯨の首を落とした男は——スバルの予想通りの男、凡才エミヤシロウの弓兵だった。

アーチャーの手に持つ夫婦剣の形状はまるで羽のよう。白と黒の巨大な羽だ。たった一振りで白鯨の首を飛ばしたことを見れば、切れ味は異常。

——補足だが、白鯨を斬り飛ばしたのはアーチャーの愛剣である干将・莫耶だ。しかし形が異なるのは、アーチャーの強化の魔術によるもの。大剣故に威力は絶大。事実それはギリシアヘラクレの大英雄クレを殺せるほどのもの。生半な宝具では突破できないような鉄壁を誇るヘラクレスを殺せるほどの代物だ。それほどの宝具ならば、たかが白鯨の首を落とせない方が不思議だというのは言うまでもあるまい。

頭を落とされ翼力を失った白鯨は、地ならしのような振動と共に地面に激突し——霧のような、光のような粒子に変わった。その粒は天に昇り、霧の向こう側へと消えた。

「——ヴィルヘルムさん!?!」

当然白鯨の肉体が消失すれば、その体内にいたヴィルヘルムも外界に晒される訳で。突然地上数メートルに投げ出された形となった。

ヴィルヘルムが抵抗無く自由落下するも——アーチャーが難なくキャッチ。その瞬間にはもう黒白の双剣は手にしていなかったが。

恐らく、たまたまスバルの見ていない時にそれらを消したのだろう。「リカード、彼をフェリスの元まで頼めるかね？」

アーチャーはリカードへと歩み寄り、横抱きにしたヴィルヘルムを受け渡した。彼の傷はそれはそれは凄いもので。身体中から流血し、右腕に至っては千切れる寸前である。

「うおっ……ヴィルヘルムさん大丈夫なのか？」

「フェリスに任せればなんの問題もあるまい」

スバルの心配も分かるが、クルシユの言うように『青』の称号を持つ彼に頼めば即座に完治する筈だ。

「…分かった、任せとき。せやけど、アンタらはどないすんねん」

「私は——」アーチャーとクルシユはスバルを一度見て「——少しスバルと話したいことがある」

「ほんなら、ヴィルヘルムさん届けた後、ワイは向こうの方に加勢するわ」

「了解した」

快く承諾したりカードはライガーに指示を出して、向きを反転。フェリスが治療を行っている大樹の根元へ走らせた。

それを見届けた後、アーチャーはスバルに向き直る。

「さて、スバル。初めに謝罪をしたい。手助けに遅れてすまない」

「あ……いやいやー」

一瞬で全てを片付けた男の謝罪に困惑するスバル。

確かに早く来ていれば、その分だけヴィルヘルム救出も早まっていただろうが——そもそもアーチャーがこの場にいること自体が、奇跡なのだ。彼という絶大な戦力とは、若しかしたら出会うことすらなかったのかも知れないのだから。故にスバルは彼を責めるような事はしなかった。

「そして遅れた理由だが、クルシユと話していたのだ。白鯨が増えた、その原因をな」

「……それは俺も考えてたけど……何か分かったのか!？」

「ああ」

そう。アーチャーはクルシユとその事について話しながら、『鉄の牙』や老兵達の加勢をしていたのだ。その仮説を検証しつつ。

スバルがアーチャーが辿り着けた仮説に至らなかったのは、単に白鯨と戦わなかった為だ。増える前後の白鯨と戦ったアーチャーだからこそ、答えに辿り着いた。そのヒントをスバルも握っていたら。

「私が白鯨と戦闘した感触ではあるが、白鯨は軽くなって……いや、弱体化していた」

「ツツ」

最後のピースがスバルの中にハマる。
つまりだ。

「——白鯨は三体いたんじゃないやなくて、分裂していた……ってことか!?!」

「……ああ、私達もその結論に至ったよ。証拠に、どの白鯨も揃いも揃って隻眼だ」

「なるほど……ヴィルヘルムさんが抉りつつた眼球の傷ごと分裂したという訳ですね?」

全くもってレムの推察通りだ。現れた五体が傷ごと共有している理由など一つしかない——元々同じ一体から作り出されたからに他ならない。

根拠はまだある。

あれだけの人数でようやく拮抗していた白鯨討伐。その後『霧』の影響で大きく人数が削られたにも関わらず、数が増えた後に白鯨と渡り合っていたのも。レムとリカードが二人で白鯨に十分にダメージを与えられたのも。それが分裂によるものだったならば、納得が行く。

アーチャーに狩られた白鯨が光のような霧の粒になって空に昇ったのも理解できる。分裂体が消滅したため、それを維持していた何らかの要素を本体に戻したのだろう。

導かれた仮定に沿えば、スバルが感じていた感覚も説明がつく。ヴィルヘルムがまだ飲み込まれる前。アーチャーが倒した一体目の

白鯨が降ってくるよりも前。スバルがレムに言った言葉——"

きつと白鯨は初めから上にいた"。スバルは魔獣に惹かれる体質にあるが、白鯨という巨大な質量を持つ魔獣に至っては万有引力さながらの何かが、彼らを結ぶのかもしれない。その為にスバルは「本体は初めから上空に浮かんでいた」という事実を直感的に感じていたのだろう。

——仮にアーチャーがこの場にいなければ。仮にスバルが声を上げていなければ。この戦線は間違いなく崩壊していた。

『消滅の霧』という一撃必殺を持つが為に、白鯨は耐久力より手数、即ち「数の暴力」を選択した。白鯨という低知能の魔獣が人間の性質を把握した上でその手を打ったとは考えにくいだが、事実、その前に討伐隊の心は折られかけたのだ。

最もそれはこの男の前では、失策だったようだが——。

「残った三体の白鯨を殺す……」

「私ならば落とせるが……スバル、君はどうしたい？」

彼の言う通り、アーチャーの手を借りれば五分もしないうちに片付く。一体は首を落として、空に浮く二体は撃ち落とせば良い——それだけで全てが終わる。白鯨討伐が簡単な「作業」になる。

然し。

「……俺は、反対だ」

「スバルくん……？」

スバルはそれを「良し」と頷かなかった。

眉を寄せて首を振るスバルを怪訝な顔で見るレムと——不敵に笑うアーチャー。まるでそんなスバルの反応を読んでいたかのよう

に。

"アーチャーが白鯨を排除する"

それで簡単に終わるが——それでは決定的に足りないものがあった。

「……俺は、白鯨のトドメはヴィルヘルムさんに刺してもらいたい……いや、ヴィルヘルムさんがトドメを刺さなきゃいけないんだ」

今は大怪我を負いフェリスの治療を受けているが、あと数分で動くには問題ない迄に回復するはず。ならばそれまでに白鯨を落とし、最期の一撃をヴィルヘルムに刺してもらわなければ、嘘ではないか。

何故なら――。

「ヴィルヘルムさんは十四年も白鯨を追っていたんだ……」

ただ孤独に、そして孤高に。白鯨を殺さんと追い続けた。妻であるテレシア・ヴァン・アストレアの仇をとるために。

それを、言い方は悪いが、ぽつと出のアーチャーにすべて持っていかれたら。ヴィルヘルムの復讐はどうなる？彼のテレシアへの想いはどうなる？

「だから、最後はヴィルヘルムさんに締めてほしい……ッ！」

真剣な眼差しでクルシユとアーチャーを見詰める。

「……君はその発言の意味をわかっているのかね？」

スバルとて、無茶を言っているのは分かっている。戦の事を考えると、アーチャーに倒してもらうのが最善かつ最速の手段だろう。

「分かっている、つもりだよ。それでも――それでも。俺はヴィルヘルムさんに頼みたい」

「そこまで言う君に、何か策はあるのかね？白鯨を確実に落とせる策を」

ナツキスバルは、ヴィルヘルム・ヴァン・アストレアという尊敬に値する人物を、どうしても無視出来ないのだ。

作戦はあるにはある。アーチャーや、或いはレムに頼る事にはなる

が――

「……アーさん、クルシユさん……レム。アーさんに頼むよりかは、少しばかり賭けの要素が強くなるけど……それでも乗ってくれるか？」

自分の意見を通そうとしているのだ。スバル自身が出しやばらないでどうする。

「頼む。白鯨を落とすのは俺にやらせてくれ」

アーチャーに撃って貰えば、それで終わりだ。倒すことも、そして落とす事も可能だろう。だが――それではゼロからの始めたはずのナツキスバルは、何も変わらず終いでは無いか。ここで白鯨に立ち

向かう。白鯨を落とす——確かな覚悟を持って。

スバルの意見をクルシユとアーチャーはどう受け取るのか。クルシユに至っては指揮官として、常に最良の手を判断する必要があるのだが……しかし返答は予想外のものだった。

「……良いだろう。ぜひ乗ろう、ナツキスバル、君の作戦に」

快い答えが返ってきた。

「お、おう……意外にすんなりゴーが出てこっちは驚いてるよ……」

アーチャーも討伐隊が編成されるまでの流れは聞いた。それには間違いなくスバルの貢献が大きく、当然ヴィルヘルムの意思もそこにはある。クルシユもアーチャーも、彼ら二人を尊重しない訳が無いだろう。

それを踏まえると、実を言えばアーチャーの狙撃にも不安要素はあった。確かに白鯨を落とすのは簡単だ。しかしアーチャーであっても、当の白鯨がどこまで耐え切るかを全く読めなかったのだ。アーチャー自身が手加減しようが、死の寸前まで耐え続ければ、落ちた時には白鯨の生命活動は停止する。クルシユもアーチャーもトドメは間違いなくヴィルヘルムだとは考えていたが、結局、白鯨のタフネスさを考慮するとどうしても不確定要素が出てくるのだ。

「さて、ナツキスバル。いよいよ大詰めだ。卿の作戦とやらを聞かせてくれないか？」

「おっと……そうだったな」

——クルシユに促され、スバルが作戦を語り出す。

「作戦は単純明快。さつき頼んだ通り、俺が白鯨を落とすだけだ」

「だが具体的な手段はどうする？言うのは簡単だが、実際出来るかどうかとなると話は別だ。まさか卿が、アーチャーのような力技で……とは行くまい」

スバルが非力なのは百も承知——それで尚、彼の表情を見て、彼に賭けると決めたのだから。しかし、具体性に欠けた作戦を聞いたク

ルシユが疑問を持つのも止むを得まい。

「けど、クルシユさん、俺が魔獣と引き合う体質だってことは知ってるよな?」

「無論。卿から聞いたからな」

そんなクルシユに対し、スバルは明快な答えを送る。

「! まさか……」

スバルが持つ魔獣と引き付け合う体質。そして、作戦の到達点である白鯨を落とすという帰結——ここまでヒントを貰えば、クルシユは……いや誰だって気付く。スバルが言った「賭けの要素が強くなる」という言葉の真意に。

アーチャーのように火力にものを言わせて落とすのではない。

「ああ——」

むしろ逆。白鯨の方から大地に向かうように仕向けるのだ。

「力づくで白鯨を空から引きずり落とす!!」

そう言っつてスバルは天を指差した。

▷▷T o b e c o n t i n u e d

第九話

元は一つの個体だった魔獣は、魔法か或いは生まれ持った特性か。五体に分裂した。

圧倒的物量にて脆弱な人間を颯り殺す腹積もりだったのだ。事実白鯨討伐に参加した人間の大半の心は折れる寸前まで追い詰められていた。

が、しかし。白鯨にとって最大の誤算が一つ。

白鯨が隻眼をギョロりと動かし、空から忌々しげに見下ろした赤い外套を着た男。彼によって二体もの分身が落とされた。

そして、彼に勢い付けられるように——或いは彼の存在を心の支えに。諦めかけていた人間達も盛り返してきたのだ。その証拠に、彼等は分身とはいえ、自分自身と渡り合っていたのだから。

殺し、そして殺される戦場に「たれば」を持ち込んだところでのんの役にも立たないが、アーチャーがいなかったならば、確かに人間を蹂躪することは容易だったはず。

——さて、どうしたものか。

現在残っているのは空に舞う二体。加えて、弱小種と戦火を交えている一体。勿論スバル達が推理したように、本体は一体のみだ。

はつきり言って、此度の討伐隊は強すぎた。正確には、直前に参加した「アーチャーが」ではあるが。

白鯨は『暴食の魔女』に生み出されたとは言え、生物である事には変わりない。

『生命』の究極の目的の一つは『生きること』。生を謳歌し、自身の欲望に忠実に時を過ごすことだ。

人間は所詮「エサ」でしかないが、明らかな自身の劣勢を悟れば逃げるのが最善手となることは当然だった。ここで命を絶たれれば、元も子もないのだから。このままでは、勢いに押されて敗北することは必定。

「……………」
取るべきは逃走の一手。念の為、と隣に置いた一体を盾に白鯨は戦闘区域から一気に抜け出す。

アーチャーあの赤い男は加勢していないようだが、平野ではまだ一体の分身が戦闘を続けている。

アーチャーのもとへ側に残しておいた一体を投入し、捨て駒として逃げるに十分な時間を稼がせるのだ。

「……………」

本体がそう考えると、マナで繋がっている分身体にもその思考が伝わる。すると、

「……………」

地上から見れば、月の輪郭をなぞるように——しかしそこには美しさは無く遊泳していた片割れが、方向を変えて戦場へと空を泳ぐ。

「……………」

前回、大規模にニンゲンと矛を交えたのはいつだったか。四百年という時の経過の中では、ほんの少し前の事だったようにも思える。

今回もまたニンゲンは自分を殺そうとして、何も出来ずに——もつと言えば、被害を出すだけ出して、終わるのだろうか。

「……………」

白鯨は人の尊厳を踏みじじる悪辣な魔獣。ここまで具体的な思考は叶わずとも、ニンゲン達が置かれた状況を理解し、愉悦に浸れるくらいに知能は持ち合わせていた。

ああ、残念だったな、ニンゲン。

白鯨がもし、人と会話することが可能だったなら。嗤って、嘲笑って、愚弄わらうことだろう。

あとは、このまま霧に乗じて逃げるのみ。

全身を震わせ、身体の随所から『口』が現れる。あとはこれらから霧を——。

——そう思っていた。

そんな時だ。

地上より飛来した氷の柱が白鯨の一本角を掠める。鬼の少女が

練った魔力の結晶。それが白鯨目掛けて飛来したのだ。しかし、角を掠るに留まったその攻撃は攻撃としての意味を成していない。そんな氷^{もの}ではこの魔獣の動きを止めることは出来ない。しかし。

「——よう」

どうやら先程の氷柱は違う意図で撃たれたものだったらしい。その氷の槍にて鯨の霧という暴力を、直接的に止めるためではなく。

「お前が本物ってことでいいんだよな……あ、なら逃げようとしてた？アーさんに追い詰められたから、偽物^{あいつ}を盾にとんずらしようとしてたんなら、悪いねえ」

そう、氷の柱はこのニンゲンを、白鯨の一角に届けるためのものだった。

辺りに耐え難い『悪臭』を撒き散らす、このニンゲンを。

「けど、お前は逃がさねえよ。——言つとくが俺は、シカトできないくらいウザさに定評がある男だぜ？」

白鯨は生き残るためには気付くべきだった。本能のままにしか生きられない、低知能なその脳みそで、その答えに辿り着くべきだった。既に逃げることにすら叶わない、詰みの段階に入っていたのだと。分身というタネが暴かれたことで、この戦いに決着がつく刻まで既に秒読み段階なのだ——と。

* * *

数分遡る。

「——白鯨をその身で、天より引きずり落とす訳か。……なるほど、

卿の特異体質なら、成せるかも知れんな」

スバルが手短かに作戦を伝えた。

つまり、こうだ。

彼が放つ強烈な『魔女の残り香』にて白鯨の全神経をスバルに向けさせる。そして、ただ魔法という暴力で地面に突き落とすのではなく、その体質で以て白鯨自ら大地に向かって泳ぐよう仕向ける。

そうすることで、白鯨の耐久性を度外視して、強制的に人間の手が届く領域に引きずり込める。

重要なことは、白鯨を「生きたまま」落とすことなのだ。赤い弓兵がいる限り、殺すこと自体は何も難しくはない——いざとなれば、ヴイルヘルムには諦めてもらう可能性が無いとは言えないが。

「スバルの魔獣を引きつける体質か……それはどれほどの距離で効くのだね？」

「ついさつき使った時はあっちでまだ戦ってる白鯨も俺の臭いに惹かれたみたいだ」

スバルが指さした方では、兵士、そして傭兵団が分身の一体と現在も戦闘を続けていた。

「それに、前は森一つ覆うくらいはいけたから、守備範囲そのものは結構あると思うぜ？」

「……なるほど」

森の話をスバルが切り出すと、同じ地竜に跨っていたレムが少し悲痛な顔をした。——恐らく何かあったのだろう、アーチャーはそう察するも、それ以上詮索はしなかった。

「ならばこの距離でも十分か……。ああ、それと、恐らくだが白鯨はこれ以上の手札を持ち合わせていない」

「それは何故？」

「簡単だよ。もし他に何か隠していれば、今も尚戦っている彼らでは均衡は保てる筈もないからね」

この弓兵によって既に二体の白鯨が狩られた。さらに、あろう事か人数が遥かに減った討伐隊と互角に戦っているのだ。

客観的に見るに、明らかに大魔獣の劣勢。本体の白鯨もそれを悟つ

ていないわけが無い。

にも関わらず、次の手を打たないところを見ると……警戒は解くべきでは無いが、やはり、これ以上のカードを白鯨は隠していないと考えるのが妥当だろう。

「目をくらまし、我々を混乱に貶める霧。そして、呑み込んだ者をこの世から痕跡ごと消し去る、奇怪な霧。確かに脅威だ——しかし、所詮それだけだ。手札が分かれば、対策は難くない。と言うより、単純に、先にこちらが手を打てば良いだけだがね」

「だったら、俺が白鯨の鼻先に直接乗り込むぜ。白鯨が逃げるにしても、また霧を打ってくるにしても、もう後手には回らねえ」

圧倒的物量の奇襲にて序盤は先手を取ったものの、狂気を伝える霧に視界を閉ざされたのをきっかけに攻守が逆転した。

もう厄介な霧の魔獣には先手は取らせない。

スバルの考えは至極当然のものであり——そこにクルシユが現実的にこの作戦を見据えた疑問を抱く。

「確かに完璧な作戦に聞こえるな……しかし、ナツキスバル。肝心の白鯨の下へ行く手段はどうする？ 仮にそこまで飛べたとして、待ち受けるのは二体の鯨だ。卿には少し荷が重いように思える」

「あ……やべ。考えてなかった……けど、本体が逃げるとなれば、侍らせた偽物はこつちに特攻させるんじゃないやねえか？」

「そうだな……その可能性が高い、か」

「ああ、あともう一つの質問に対する回答だけだし、アーさん、白鯨の下まで俺を連れて行ってくれねえか？」

スバルから言わせれば、この場においてアーチャーはラインハルト同様に「何もかもを両断する理不尽さ」の体現のようにも思えた。だからこそアーチャーなら何とかできないか……と期待を込めて言ったのだが。

「ふむ……無理だな。諦めろ、スバル」

それはアーチャー本人によって却下される。とは言え、その理由は真つ当なもので——

「私がああ鯨まで飛べたとして、踏み切ったときに一瞬で加速するぞ

？君が耐えられるとは思えんな」

「あ、ああ……うん。それはたしかに無理だわ。俺が死ぬので、アーさん案は却下で」

それは、スバルが一番理解しているかもしれない。

大跳躍、そして急激な加速。アーチャーは耐え切れる。しかし、彼に連れられたスバルは、その慣性力による圧死——そんなアホみたいな理由で『死に戻り』なんて、スバルとしても御免だった。

「となれば……ううむ……」

確実に白鯨を落とす策がある——などと言いつつ、本当に具体的な部分までは検討していなかったとは、何とも間抜けだ……と、そこでスバルに閃きが。

「あーレム、あの野郎のすぐ近くに氷の山を浮かべるとか……」

「ごめんなさい。マナは手元から離れば離れるほど、扱いが難しくなります。ロズワール様なら可能だと思いますが、レムの腕では恐らく」

状況を打開できる可能性が見えたのに、スバルに手を貸せないことを無力に思うレム。しかしならば別の方法で、白鯨その下まで行けば良い。

「……なら、氷の槍を飛ばして、俺を連れてつてくれ!!」

「——え?」

作戦がまとまれば、即座に行動を開始すべきだ。スバルがこれ以上後手には回らないと言ったが、それは誰もが同じ考えだ。

そのため、アーチャーもクルシユもここにはいない。クルシユは作戦の実行に必要な魔法を使える者達の下へ、その作戦を伝えに行つたのだ。

そしてスバルとレムもまた、作戦の実行の肝。

「それじゃ、頼むぜ……レム?」

「……」

スバルはレムが《アル・ヒューマ》により生成した氷に捕まって鯨へ飛ぶつもりだ。目的から逆算すると、それがベストの選択だから。スバルがレムにそう頼むも——しかし、俯いていたレムは静かに顔を上げ。

「……本当は、反対なんです」

レムは胸の内を吐露する。

「スバルくんが率先して白鯨の鼻先を回ることも、レムは反対だったんです。氷に乗って飛ぶのも危険で、しかも飛んだ先は強大な霧の魔獣……スバルくんの命がいくつあっても足りないくらい、危ないんです。」

これはレムのワガママだってわかっています。スバルくんのかっこいいところを見せてほしい、そんなことを言っておきながら、ワガママを言うのは反則だって分かっています。けど……」

「レム……」

その感情は、残酷なまでの自己矛盾。

自分の凍てついた時を優しく溶かした英雄スバルの輝く姿を見たい。白鯨を落とし、十四年という決して短くない時間を捧げた復讐に——そして、四百年の「悲しみに辿り着けなかった悲しみ」に。その全てに決着をつけて欲しい。

その反面、彼を愛するからこそ、無茶は避けて欲しい。弱小種である人類の典型のようなスバルは、「何か」が起きればそれだけで命が消し飛ぶ。加護もなく、魔法も使えず、かと言って剣術のような一芸に長けている訳でもなく。そんな男が、自ら死地に飛び込むのだ。レムが容易に受け入れられるはずも無かった。

しかし。だからこそ——スバルもまた、真っ直ぐ彼女を見る。

「——ごめん。あと、ありがとう。でも、俺はやるよ」

……ゼロから始まる前の自分なら。王都の高台でレムと話す前の自分なら。或いはこんな選択を自ら手に取ることは無かっただろうと、スバルは自分を省みて苦笑する。

今この瞬間、スバルの中に存在する感情は純粹に、無垢に、真摯に自分のことを想ってくれるレムへの感謝と——偽りの勇氣^{メッキ}。

英雄になると誓った自分を裏切らないため、絞り出した勇氣。相手は三大魔獣と謳われた白鯨。本当は怖い。本音を言えば逃げたい。ヴィルヘルムの為、スバルがやらなければ——という義務は別にないのだ。

けど、そんなものは自分には似合わない。

「俺さ、アーさんが戦ってるのを見て、ほんとにかっこいいって思った。ラインハルトとかアーさんとかが"英雄"って呼ばれる人達なんだな、って本気で感じたよ」

レムは静かに頷く。

「……王都で言ったけどさ、俺は、弱いんだよ。一人だと何も出来ない。何も成せない。何者にもなれないんだ。

だけど、一人で出来ないから何だ。そもそも一人で何でも、つてのが間違いだった」

今なら断言して言える。

魔女教のことを知っていたのにそのことを伝えず、そして彼女を殺したループもあった。信じてもらえないと考えたから、言えなかった。

しかしそれはスバルの思い違いでしかない。レムのスバルへ寄せた信頼は、そんな低次元ではないのだから。

「俺はレムを信じてる。何があっても、お前がいれば大丈夫だ——俺の止まっていた時を動かすことを、手伝ってくれ」

「……やっぱりスバルくんはずるいです」

不安そうな顔をしていたレムも、スバルの言葉を聞いて柔らかく笑う。不安ではある。安心はできない。しかし、自分の英雄がそう言うてくれたのだ。

だったらやることは一つ。

「レム。俺を白鯨の下まで連れて行ってくれ。頼むぜ！」

「はい——」

——スバルは剣鬼のために生け捕りしようと、白鯨の下へ直接殴り込んだ。一瞬とは言え心臓を鷲掴みされる苦痛があるにも関わらず、どす黒い『魔女の残り香』にて魔獣を逃がさない。

——レムは信愛する少年がそれを成し遂げられるようにと、最大限のバックアップをする。スバルが地上に白鯨を叩き落とした後も、共に鼻先を逃げ回るつもりだ。

——クルシユは白鯨が堕ちた後のことを考え、樹齢千年を超える大樹を倒せるだけの者をかき集めた。

——そしてもう一人の鍵であるアーチャーは。

「さて……スバルも無事に辿り着いたようだ」

氷の柱が、一直線に白鯨の下まで飛び——そして、鯨の角にスバルが飛び乗ったことを目視。

同時に、つい数秒前まで本体の護衛をするかのように遊泳していた白鯨が、自分へとなんの迷い無く接近して来ることも確認。

スバルにとっての関門は二つだった。

一つは、白鯨の鼻先へどうやって飛ぶか、だがそれは既に解決済みだ。

一つは、そこで待ち受ける白き双壁。例え、分身がアーチャーへ特攻し、その場から離れたとしてと、スバルの異臭につられて双方共が引き寄せられれば、面倒なことになるのは言うまでもない。

分身とはいえ、相手は伝説の魔獣。四百年、人に対して害を為してきた阿漕。

クルシユが思ったように、スバルには——いや、彼でなくともそうだ。ただ独力で白鯨と対峙出来る者はそれこそ英雄の領域に住まう怪物のみ。強大な個に対抗出来るのは強大な個。怪物に対抗出来

るのは怪物だけだ。

ならば、と。

ここに居るではないか。英雄が。神代の時代を生き抜いた真なる英雄と刃を交えた、英雄が。

スバルはなんの迷い無く、赤い弓兵に頭を下げた。

『本体を大樹に誘導してる間、分身の方の時間稼ぎはアーさんに頼みたい。任せても大丈夫か?』

『時間稼ぎ、か……無論だ。任された』

これをアーチャーは快諾。

しかし、スバルに見落としが一つ。

『しかし……別にアレを倒してしまっても構わないのだろうか?』

』

そうだ——そうだった。スバルの目の前に立つこの赤い男は、紛れも無く白鯨殺しを成し遂げたのだ。それも、二体も。

『卿にかかれば、白鯨を相手にしても足止め程度で収まるわけがない……ということか。何とも頼もしいことを言ってくれる』

『当然だよ、クルシユ。格上ならまだしも、自分より下の相手に"時間稼ぎ"は無いだろう?』

『それもそうだな』

スバルは、アーチャーが口にした白鯨に対する皮肉に対して、大船——所ではなく、軍艦か何かに乗った気分になった。

霧で視界が閉ざされた直後、白鯨の追撃を退けた時も。ウイルスヘルムを呑み込んだ白鯨を一刀で切り伏せた時も。

どんな時も、スバルはアーチャーに圧倒的な安心感を覚えた。

絶対的な安定。彼ならば容易くこなせるという信頼。出会って半日も経っていないが、アーチャーはスバルの中ではそれほどの人間なのだ。

だからスバルはもう一度頭を下げた。

アーチャーがいるならば、何の不安要素もなく作戦が遂行できる。

そう確信しながら――。

弓兵を目掛けて、醜悪な魔獣が泳ぐ。自身を守る身代わりではなく、アーチャーを止める盾――いや、捨て駒として送り込まれたのだろう。

生き残っている分身は二体。内、片方は兵团や傭兵と戦っているが、この加勢に向かえば、そちらは勝てるかもしれない。しかし、そうなるとアーチャーが自由になる。白鯨は低知能ながらそれを嫌ったのだ。

「――」

「実に醜いな、獣」

そんな白鯨を見て、アーチャーの表情は侮蔑に染まる。その外見もそうであるが、たかが分身体如きで足止めできると思われていることが不快。

「――」

聞くに耐えない声を上げながら偽りの白鯨は、自分自身本体を逃がすため、口を開き――そして『消滅の霧』を装填。何十人、或いは百人単位で人間を呑み込めるその巨大な口に、十分な霧を溜め込む。

外野が何か言っている。危ないぞ、逃げろ、と。

だがアーチャーは周囲の警告を全く無視して、魔術を行使。エミヤシロウにただ一つ許された魔術だ。

手に現れたのは漆黒の長弓と、同じく虚空より創造した剣を――それは剣と呼ぶには歪な形をしていた――つが番える。

刀身は万物を貫くとも思える螺旋を描いているのだ。

「――」

迫る白鯨。

勇敢にその魔獣に立ち向かうでもなく、恐れをなして逃げ惑うでもなく。この弓兵は平坦に、冷静に、研ぎ澄まされた瞳で見据え――力強く大地を踏みしめながら、詠唱と共に弓を引く。

すると、まるで剣が呼応するように細長く伸び、一瞬にして「剣」が「矢」になる。

「I am the born of my sword」

アーチャーが詠唱を口にしたその瞬間、目に見えるほどの膨大な魔力の奔流が引き起こる。

これほどの勢いで、そしてこれほど膨大な魔力が収束することは滅多に見られる現象ではない。六大元素全ての魔法を最大限扱える口ズワールでさえ、或いは難しいかも知れない。

その危険性も異常性も全て本能で察知していた白鯨だが、所詮は捨て駒分身。退くという選択肢はありえないと、アーチャーへ装填していた『消滅の霧』を放出。大気を飲み込みながら、世界を蹂躪する霧が迫る。

しかし弓兵の中に焦燥など無い。

何故なら、その名を解放する時点で生中な反撃を試みようが。

背を向け、惨めに逃げようが。

空間ごと転移し、脅威から逃れようとしようが。

真作では無いとはいえ——神話に於いて無敵の剣と評されたそれは、全てを喰い破るのだから。

「偽・螺旋剣」

放たれた矢は一瞬にして音を超え、光と成り。向かい来る霧をものともせず——それどころか、吹き飛ばしながら突き進む。

霧を抜けた先には無防備な魔獣。

音速をはるかに超えた剣を回避できるはずも無く。

赤い弓兵の足止めという使命は果たされぬまま。魔獣の皮をかぶった幻影は、その矢によって空間ごとこの世から抉り取られた。

ズタズタに、引き裂かれた。

▷
▷ T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第十話

腕を組み、不敵に笑いながら白鯨の角に立つナツキスバル。

——あとはここから飛び降り、『死に戻り』を大胆に告白するだけ。それだけで逃走態勢に入った白鯨は、一転。本能のままにスバルを殺そうとするだろう。

「そんじゃ、そろそろやりますか」

スバルは意を決し、自分が置かれた状況を理解していない白鯨から腰を入れて飛び降りた。

「……つとー」

惑星に引かれるままに、加速度的に、自由落下するが——その姿を、醜怪な魔獣はただただ見下ろしていた。

つい数秒前まで自分の角に立っていたニンゲンは、確かに臭かった。ただでさえ見るに堪えない顔をさらに醜く歪めてしまうほどに。しかしそれだけだった。白鯨は生存本能が選択した逃走の一手は変わっていないからこそ、盛大な自殺をしたニンゲンを深追いする必要性を何ら感じないのだ。

多少体は向けたが、尾の動きを止めた。そして霧をまき散らすべく、白鯨は再び身体中から口を展開。

生存本能。なるほど、手強い。

何があっても生き残る。

生物由来——生まれながらに備えられた究極の本能。その枷はなかなか崩せない。

ならば、更に強い『悪臭』にて、その行動の足枷を吹き飛ばす他あるまい——。

「この野郎、逃げないでよく聞けや！てめえのせいでレムが死んで、俺

はすげえトラウマ背負ったぞコラア!!」

その刹那。

身体中の神経が全て断ち切られたかのように、指先ですらピクリとも動かせ無くなる。——いや、それほど生易しいものではない。

スバルを包む世界の時が、止まった。

視覚も生きており、白鯨も直前のまま静止している。スバルは臍氣に思考も働き、現実味が無い空間に生きていると実感していた。

そして時が止まって、

『愛してる』

再び何か囁かれる。

『愛してる』

ヴィルヘルムを呑み込んだ白鯨を逃がさないようにした時と同じ声だ。

『愛してる』

不可思議で。

『愛してる』

魅惑的で。

『愛してる』

妖しくて。

『愛してる』

艶麗で。

『愛してる』

優しくて——。

『愛してる』

そんな女の言葉を聞き届けた瞬間。

スバルの心臓は掴み取られた。

その衝撃はまるで全身に稲妻が駆け巡るようなものだ。

背中側から全てを貫通する手が胸に入り込み、スバルの赤い炎を全身に循環させるポンプを直接掴んだのだ。その掌は、つい数秒前の柔らかな声とは裏腹に、荒々しくスバルの心臓を握った。

圧倒的な異物感と苦痛に、叫ぶことも許されない凍りついた異質な空間だが――

「戻って、きたああああ!!」

直前まで『何か』に心臓を鷲掴みされていた激痛と、一身に受け止める風圧。

加えて、ピタリと止まっていたはずの白鯨が、跳ねるように、スバルに向かって滑空してきたのだ。

「――、――ツツ!!」

成功だ。

死にもぐるいでスバルを殺そうとする白鯨に、恐怖心を抱いていたため虚勢なのかも知れないが、スバルはニヤリと笑った。計画の遂行を考えると、この時ばかりは生存本能すら壊す『魔女の残り香』に感謝したくなる。

そしてもう一つ。

「え――?」

スバルの遥か頭上。地上から天へと流れ星が落ちるといふ起こりえない現象をスバルは見た。しかしそれは一度見た記憶がある。

この白鯨討伐戦が始まった時だ。レムが『アル・ヒューマ』を使つた直後に、アーチャーが放つた矢がまさに今の流れ星に似た軌道を描いていた。ならば、恐らく流星それもまた、かの弓兵が分身を殺すために射つた矢なのだろう。

仮に、誰もが彼ほどの腕を持つ狙撃の名手なら、この異世界でも弓矢がさらに普及していただろう。この世の魔法体系に存在しない蒼炎を巻き起こす矢は、ともすれば『アル・ゴア』よりも強力なのだ。

――なんて、スバルに迫りつつある白鯨から目を逸らすような考えに耽っているのは、覚悟を決めていたとはいえ、スバルも恐怖を覚えていくからだ。所謂、現実逃避。

スバルは白鯨を挑発するかのように笑っているが、心の内に恐れがないと言えは嘘だ。何度も『死』を体験しているが、それは慣れるものでも無いし、恐怖は克服できそうにない。

「――――っ!」

それに、白鯨の狂気に染まった眼を見れば尚更。生物らしく生存本能の傀儡として、比較的冷静に行動しようとしていたこの魔獣が、スバルを殺すことだけに思考が染められているのだ。

口を大きく開き、咆哮を何度も上げ、空気を揺らし、強烈な『魔女の残り香』を匂わせるスバルとの距離を詰める。

このままではまた『死に戻り』をすることになるだろう。口にすっぽり収まるか、或いは空中で白鯨に轢かれるか。

だが——スバルの犠牲を、あの弓兵が易々と許すだろうか？

「ー、ーっっ」

大地衝突まであと十数メートルまで迫った時。鯨の白き岩肌が青に爆ぜた。

当然、白鯨は大きく逸れた。苦悶と共に、隙が生まれる。

「レム——!!!」

「はいっっ!!!」

それを見逃さなかったスバルの叫びに応えたレム。パトラッシュに乗っていた彼女は、モーニングスターの鎖でスバルを巻き取り、手元に手繰り寄せた。

「ぐえ”っ……………」

レムのおかげでスバルは白鯨が進む軌道上から外れ、そして白鯨は勢いのままに頭から大地に突っ込む。スバル達はそれを背にして、ただただ逃げる。

「レム、助かった。んで、俺の匂いは？」

「はい。さつきより、凄い匂いです！」

「あ……うん。やっぱり言い方ひどいね！」

などと軽口を叩きながらも、スバルはパトラッシュに激を入れる。

「頼むぜ、パトラッシュ！ドラゴンなんだろ!? かつこいとこ見せてくれ!!」

この地竜に命を託す。

白鯨は莫大な質量を持つ惑星に正面衝突し、既に満身創痍だろう。相手が人間なら蹂躪できる。しかし、自身より重いモノに激突すれば、白鯨とてただでは済まない。

しかし、スバルはまだ逃げる。何故なら白鯨の目は、未だ狂気一色なのだから。

「……………」

魔獣の咆哮が空気を激震させる。

怒りのままにスバルに追いつがっていた速度はかなりのものだったようで、地揺れさながらに大地が激震し、土は大きく抉られる。白鯨の質量・速度を考えれば、隕石が地球に激突した衝撃のちよつとした下位互換とも言える。

土煙が高く舞い、しかし白鯨は止まらない。

ここまで怒り狂わせる『魔女』は、魔獣とどんな軋轢があつたのか少し気になるところだが、そんなことを考えている暇は無い。

「……………」

スバルは背後から襲い来るプレッシャーを感じつつ、目的の場所へ誘導する。今の今までそこで負傷者を休ませていたが、クルシユに頼んで、彼らは退避済みだ。

「……………」

白鯨はより一層憤怒を内包した叫びを上げる。逃げることなど頭がない。あるのは、憎悪を煽る悪臭を全身から発するスバルを、何かなんでも殺すことだけ。

だからだろうか。白鯨は周りをあまりに見ていなかった。

「食らいやがれ——ツツ!!」

白鯨が物の見事に誘導されたそこは——樹齢千年を超えるフリーユゲルの大樹だ。これをへし折り、白鯨の真上から叩き込み、そして動きを封じ込める算段だった。

タイミングを見計らって上げたスバルの声と同時に、クルシユも合図を出した。

「放て!!」

その合図と共に放たれるのは、数々の魔法による破壊。

業火による閃光。真空より作り出された見えざる刃。巨大な岩石による轟き。音の振動による破壊。その全てが幹を抉り取り、大樹が崩壊の音を立てながら——。

そこで、パトラツシユで逃げながらも後ろを確認したスバルが叫ぶ。絶望的な不都合に。

「なっ……いやべえー間に合わねえ——!!」
「なんだと!?!」

つまり、それだけ大樹は頑丈だったのだ。十二分の破壊はあった。ここでケリを付ける。

そして大木は折れ、倒れる寸前までなった。

しかしこのスピードで倒れていては、白鯨が大樹の下を通過してしまう。怒りに巨体を揺らす魔獣が通り過ぎ、それから木が倒れてきたところでなんの意味も無い。ここに誘導した目的は果たせない。

かと言って、白鯨の横腹に魔法を打ち込んだの足止めは厳しい。——魔法を唱えるには再詠唱時間リキヤストタイムが必要だ。それは詠唱者の実力次第で短くなる。が、大魔法であればあるほど長くもなる。

この場にいる魔法使いは誰もが一流ではあるが、樹を倒すことに力を入れすぎたのだ。

つまり白鯨が大樹を通り過ぎる前に再び魔法を、ということは難しいのだ。

「スバルくん!!」

「分かってる!!」

ならばどうする。

どうする、どうする……!!

——どう手を打てば、白鯨を足止めできる!?

スバルは頭から煙が出そうほど、考え尽くす。猶予はあと数秒。それだけ時間が経てば、白鯨を生け捕りする夢は潰える。

——白鯨が血眼で追いかけているのは、スバルだ。パトラツシユから飛び降り、死を覚悟して囿になれば、足止めができるか。

(どうする、菜月昴……やるか!?)

「スバルくん、それはダメです!!」

背中ではスバルの考えを察したのか、レムが考え直すよう説得する。

「でもレム、時間が——いや……違う」

あ……居た。一人。

「——アーさんツツツ!!!」

「了解した」

瞬間——いや、スバルの叫びと重なるように。

都合数十もの紅い矢が降り注ぎ、撃ち込まれ。そして、白鯨の眼前から尾ひれにかけて剣山を作り出す。木を倒すタイミングが少しずれたのを見て、初めから動いていたのだろう。

——今宵、この弓兵に与えられた何度目の悶絶か。結果として、身体を畝^{うね}らせ、巨軀は泳ぎを止めたのだ。

「間に合った!!!」

スバルの誘導とアーチャーが作り出した刹那の足止めが功を奏し、賢者が植えたと伝えられる大樹が——白鯨の動きを完膚なきまでに停止させた。

樹齢千年。想像も絶する時間の流れを体験した大樹は、白鯨の岩肌の如き装甲をまるで無視して、魔獣を叩き潰す。白鯨とて逃れはしない。

白鯨の質量すら嘲笑うほど重いその木は、先程白鯨が激突した時以上の衝撃が大地を襲う。

巻き上げられた土が周囲全てを、未だ戦いを続けていた残る分身の白鯨すら飲み込み、霧が吹き飛ぶ。

* * *

——四百年だ。世界に忌み嫌われるこの魔獣が世に姿を見せてから、それだけの年月が経過していた。

この間、この魔獣を殺してみせた者は存在しない。ルグニカ王国が誇る『剣聖』率いた討伐隊ですら、『霧の魔獣』の前に敗走を強いられた。それほど、脅威。神出鬼没の災害。

人を喰らい、彼らを知っていたはずの人々の記憶すら喰らった。

星の歴史に刻まれるであろう強大な魔獣。

そんな『霧の魔獣』が生み出し続けてきた悲しみの連鎖は、遂に——遂に、ここで終止符が打たれる。

* * *

「最愛の妻、テレシア・ヴァン・アストレアに捧げる」

スバルも、クルシユも。誰もがこの男のために動いた。それを理解しているからこそ、多大な協力をした彼らに対する恩義に報いるため。そして十四年前、自身が打ち立てた誓いを果たすため。

未だ息がある白鯨の頭に立つこの男、『剣鬼』ヴィルヘルム・ヴァン・アストレアが剣を振り下ろす。

——閃き。

宝剣が白鯨の肌を斬り裂く。ヴィルヘルムが雄叫びを上げながら、それを追うように白鯨から吹き出す赤が世界を染める。

その在り方は、まさに『剣鬼』。

ヴィルヘルム・ヴァン・アストレアが振るった宝剣が、長く、深く、鋭い斬撃が、白鯨の巨軀を両断し——最後は目から光が失われた。

死だ。霧の魔獣は、ここに沈んだ。白鯨は、確かに討たれた。

しかし、そのような歴史的事実を前に、誰も声は上げなかった。

「やっと……」

ただ一人を除いて。

「終わったぞ、テレシア……」

満身創痍。腕は千切れかけ、白鯨の背を暴れたことで傷口という傷口から血が吹き出し。圧倒的な疲労感から、宝剣は手から離れ落ちた。

ヴィルヘルムは小さく、掠れた声で。

「私は、お前を……」

しかし、こころも気高く。そして、力強く――。

「俺は、お前を……愛している!!」

仇の屍の上で、最愛の妻への告げられることの無かった感情の昂りを――愛を。数十年の時を経て、一人の男は叫んだ。

朝焼けに向かって叫ぶ男の姿は、とても美しかった。
誰もが、そう思った。

▷▷To be continued

第十一話 『正義の味方の異世界生活』

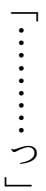
全てが終わった刻。

風に靡びかれる一人の男が、朝焼けに照らされる平原を眺めていた。



ヴィルヘルムがトドメを刺す直前。捨て身覚悟で白鯨を天より引きずり落としたスバルたちは、果たしてどうなったのか。

彼が見たのは——巨大な樹が投げ落とされた刹那、静かな地面が荒れ狂い、波打ち、岩水しぶきという岩が四方へ飛散した大地。



逃げ切れない。

飲み込む範囲を広げながら迫り来る大地の波を前に、スバルは再認識する。

——この作戦が内包する最大のリスクを。

パトラッシュの疾走は懸命だ。出しうる限りの最速。

しかし逃れることは叶わない。

加速度的に土砂の壁との距離が縮むのが、はつきりとした恐怖と共に実感できる。

スバル、レムそしてパトラッシュが、至近距離で大地の爆発に飲み込まれることは自明の理だった。

侵食範囲の拡散速度と、地竜の走行速度。

フリーユゲルの大樹が地面に叩きつけられるエネルギーを考えれば、どちらが速いかなど、目に見えた結果だった。

白鯨を生きたままにヴィルヘルムへと差し出す、というただ一つの目的の為に立案された、物量任せの暴挙。

それがスバルが実行した戦術の本質だった。

……最も、確固たる信念を以て白鯨を落とした英雄ナツキスバルの危険をみすみすと見逃す彼では無い。

或いは、幾度も軍を率いた武将が、ハイリスク・ハイリターンであるこの筋書きを、リスクを取り払いもせずに易々と認めるはずもないのだ。

「スバル！そのまま走り抜けろ!!」

アーチャーに名を呼ばれた瞬間。

背後に肉薄していた大地の波に、蒼炎が迸る。

蒼き太陽の如く世界を照らした灼熱は、完全に、とまではいかないものの、スバルを飲み込もうと迫っていた危機を減衰させた。

幾度と無くスバル達を救ってきた紅き男の助勢は、今もまた彼に安堵を与えるのだ。

一撃では終わらない。

続けて、何度も、何度も。間髪入れずに、何発も何発も——大量の爆炎が、副次的に生じた厄災へ放たれる。

その度に土砂の壁には穴が空き、大地の波は岩石もろとも溶解、スバルを喰らわんとしていた勢いは次第に沈静化される。

そして、この世界の魔法系統とは全く異なる魔力の躍動が鳴り止んだ頃。

誰もがスバル達の生還を確認し——宿願を前に、激情を静謐の中に押し留めている剣鬼が、全てを終わらせる一步を踏み出した。

そして。そして、そして——。

「俺は、テレシおアを愛しているツツ！」

届くことの無い激情を、最愛の妻へと吐き出した。



ヴィルヘルムの手によって白鯨が葬られた時は誰もが騒ぎ立てた。疲労と安堵に腰を落とすした老兵。隣に立つ同胞の生存を確かめるように抱き合う獣人の青年達。いつであろうと凜然としていたクルシユも、戦士へと労いの言葉を投げていた。

——それも束の間。

「いやあ、助かったヨ。まさか医学にも通じてるニヤンて」

「こんなもの、ただの応急処置に過ぎない」

「だとしても魔法を使わない古典的な医術で手当するなんて、才能が

にやいつてのもあながちホントなのかにや？それとも魔力を温存している、とか？」

現実問題として、すべきことは多かった。

白鯨を倒し、それで「ハイおしまい」となれば良いのだが、それは物語の中だけだ。

負傷者の治療。死者の弔い。討伐した白鯨の屍の回収。

戦争の相手が"国"では無く"怪物"^{ケモノ}だっただけで、やるべき事が山積みとなっている。

とりわけ最優先事項だったのは、怪我を負った者達の救援だった。少し間違えれば死に繋がる重症を負った者もいる。

そのの一助になればと、アーチャーはフェリスと共に素早く負傷者の手当に取りかかったのだ。

フェリスが治したのは生命に関わる重篤な、或いは時間経過により悪化すればあわや、という患者。

対してアーチャーが治療に取りかかったのは、トリアージタグにおける『緑』と『黄』の一部患者。骨折、脱臼、筋断裂、打撲、靱帯損傷——その他諸々の怪我の対応だった。

アーチャーには、フェリスのような治癒魔法は使えないが、紛争地域を渡り歩いた経験を活かし、物資が不足している状態だろうと、応急手当くらいならば容易くこなせる。

その経験が功を奏した形になった。しかし。

「何度も言っただろう？私の才能は、事実からつきしき。——なんだったら、フェリックス。魔力を温存しているのは君の方だろう？」
そもそも『アーチャーが手当をすること』など、本来ならば起きえない現実なのだ。

フェリスが治療していれば、アーチャーの出る幕はないのだから。この世界には魔法が実在し、戦場にて治療術師が健在ならば、傷痕軍人は生まれ難い^{にく}。

加えて、ルグニカ王国より《青》の称号を賜り、大陸を見ても並ぶ者はいないとされるフェリスがその気になれば、死んでさえいないの

なら万全に回復するのだ。

ならばそこから導かれる仮定……つまりそれは。

「まだ、何かあるのか？……君が、そして君たちが警戒する何かが」

「……へえ。鋭いネ」

アナスタシアの私兵団『鉄の牙』と、飛び入り参戦のこの男は聞かされてはいないはずだが……いとも容易く見抜かれた事実には、フェリスが目を細めると。

アーチャーもフェリスの反応を見て、真実を言い当てたと確信した。

「いや、なに。ここまでヒントを与えられて、察せない方がおかしいよ……しかし、信じ難いな。これほど犠牲を出した魔獣討伐に匹敵する代物に、続けて挑むとは」

「んまあ、確定ではにやいんだけどネ」

「——いや、確定だ」

ソレが一体何なのか。聞き出そうとした時だ。

横から芯の通った力強い人間の声が介入した。

「クルシユ様」

膝ほどまで生え伸びた草々を掻き分けながら、アーチャーとフェリスの言葉を継いで、会話に割って入った女性。クルシユ・カルステンだ。

彼女の後ろには、カルステン家の懐刀・ヴィルヘルムが控えており。そして、『鉄の牙』との共闘を現実のものとした仲介役、ナツキスバルとレムの二人も居合わせていた。

何やら四人で話していたのは遠目に見えたのだが、どうやら、それは終わったようだ。

「……クルシユ。若しかすると、再び私も力になれるかもしれない」

「そうしてくれるならば、此方としても心強い、……だが、その前に言わせて欲しい」

クルシユは一步前に出て、アーチャーの瞳を真摯に見つめながら、差し当たり感謝を述べた。

「感謝する。此度の白鯨討伐、卿がいなければ、どうなっていたことや

ら」

実際、複数体の白鯨が現れた時に伝播したのは、絶望だった。単体でさえ遙かに及ばない恐怖であるのに、悪魔が数を引き連れて現れたのだ。

この戦場に立つのは経験豊富な猛者たちとだったは言え、彼らの頭に「諦め」の二文字が過ぎらない訳がなかった。

しかし、彼らが立ち直ったのはナツキスバルの勇氣と——アーチャーが白鯨を落とすとしたという事実。

最弱の男でさえ諦めていないのに。

そして、最弱の男がついていけば。

諦めていい道理など、あるはずもない。

そうして彼らは復調し、見事ヴィルヘルムが討ち取った。

なればこそ、指揮官たるクルシュが礼をしたのは当然で。

「礼には及ばない——この勝利は、スバルとレムの執念、ヴィルヘルムの人生、そして君が積み上げた人徳：全てが引き寄せたものだ」

しかし、アーチャー本人はなんて事は無いと言った。

「」

アーチャーの発言にクルシュは驚き、自然と苦笑が零れた。その真意を——風見の加護を通じて察したからだ。

白鯨討伐を始める前に言ったように、

「我々を助ける理由のみならず、あろう事かそれに対する見返りも不要だとは」

そう。つまり、それだけだった。

分かっていた。

「他人を助けることに理由などいるのかね？」

この男は揺るがぬ芯と確かな強さを誇る反面、保険も保証も報酬も恩赦もなしに、戦場へと身を投じる異常さを併せ持つのだと分かっていたはずだが：それでもやはり、目の前に立つ男は狂っていた。

礼には及ばない。アーチャーが口にしたその言葉は、まるで謙遜や定型句では無かったのだ。

「……なんとも崇高で……歪な在り方だ」

これを指摘した人間は、クルシユただ一人に非ず。
あの真紅の少女は、衛宮士郎の歪みを知っていた。見抜いていた。
そして、嘗て指摘した。

最も、エミヤシロウがそれを覚えているはずも無く。

「ふ……なんだかそんな事を、昔も言われたような気もするよ」

しかし、クルシユの言葉が重なるように、まるでロボットのような
狂人おとしこに言つて聞かせる、“凜”と透き通った少女の声が、アーチャー
の脳裏に蘇り——彼はたまらず、柔らかく笑った。

そもそも、なぜフェリスが、白鯨討伐に続くナニかに気付いていた
か。

その秘密は、クルシユにあった。

感情の機微を見抜くことにおいて、クルシユには優位性がある。

即ち、『風見の加護』によつて推測していたのだ。討伐を取り纏め

たナツキスバルの真なる目的は、白鯨その先にある——と。

すると、スバルは此方の思惑を全て読み切り、その上で、わざわざ
白鯨討伐を口実にして共闘を持ちかけてきたことになる。

ならば。

それこそ並の敵では無く。寧ろ、そう考えることこそが妥当に思え
た。

その為フェリスにはその推測を伝えると共に、魔力の温存をするよ
う命じておいたのだ。

仮にクルシユの憶測が外れたならば、杞憂であつたことを確認して
から、軽傷者たちを治療させればいい。

しかしソレが確定的となつた今、何はともあれ。

ナツキスバルが狙う、二つ目の首の名は——

「次の相手は魔女教、『怠惰』担当の大罪司教だ」

一瞬、フェリスの纏う空気は緊張を孕んだ。

頭になかつた訳では無い。『世界三大魔獣』に匹敵する厄災など、古
今東西探してもソレくらいしか居まい。

それでも、いざ言葉にされれば些か思うところはあつたわけ。

世界で最も関わりを持ちたくない、いや持つてはならないとされる狂人の集団が、次なる敵であることを知る。

「魔女教……となると、魔力は温存しておいて正解でしたね、殿下」

「ああ。私は王都へ帰らねばならないが、そちらにはヴィルヘルムも同行させるつもりだ。可能な限り、隙のない布陣を組みたい」

クルシユが魔女教討伐に貸し出した戦力は、クルシユに忠誠を誓う生え抜きの兵士たちに加え、大戦力であるヴィルヘルム。治癒を担うフェリス。

「レムちゃんは、どうする?」

「もちろん、スバルくんと一緒に私も同行しますっ!」

フェリスが、スバルと共に討伐戦に参加したレムに意志を問うと、彼女は即答する。

彼女の体調は———オールグリーンとまでは言えないが、それでも魔女教との戦いに不安が残るほどではなかった。怪我はしていたものの、幸いにも魔力は枯渇していなかった。

であるならば、フェリスの魔術で十分治癒が可能だ。

「ま、お留守番は回避かじゃ。傷は今、治したげルー」

フェリスが手を当てると、レムの身体は蒼光に包まれ、時を巻き戻すように痛々しい傷が癒えていく。治癒魔術の行使だ。

ところで———スバルが小声で、アーチャーに話しかける。

「アーさん、アーさん。魔女教のことって分かるか?」

「む……いや、すまない」

「ああ、いやいや!こつちに来たばかりだからしょうがないことだぜ、それは」

そう、この世界に来たばかりのアーチャーは、魔女教を知らない。クルシユ達の会話を邪魔しないようにと、スバルはアーチャーへ耳打ちするために少しだけ背伸びし、そして、これから打ち倒すべき邪悪てきのことを語った。

「で、魔女教ってのは———……」

◆◆◆

それから。

クルシユや負傷者は、白鯨の屍を引き連れて王都へと帰った。

『鉄の牙』の援軍……街道の封鎖を担当していた「残り半分」の勢力と合流した。スバルが言うには、その中に近衛騎士団が誇る『最優』ユリウス・ユークリウスという男もいたらしい。

白鯨の討伐という荒事が片付き、現在に至るまでも、色々あった。

そして、世界の守護者——はこの場に留まっている。

「……………」

この身は本来、ここには居てはいけないもの。

守護者として契約し、時間という概念のない時間流れの中を生きた。あらゆる記憶が摩耗し、無くなり、忘れ去るほどの虚無の時間を。ならばこれも『夢』のはず。

白鯨討伐という、人の世界に仇を成す障害を取り払った今、守護者として召喚されたであろう彼の肉体は、この世界から消え去るはず——だった。

そんな彼の予測に反して、どうだろうか。

この異世界に留まり続けている上、彼の肉体は受肉を果たしているのだ。

改めて、理由は分からない。

理屈も、経緯も、何がそうさせているかさえ、何もかもが分かっている。いない。

だが一つだけ言えることはある。

「正義の味方として、生きる……か」

彼には似合わない戸惑いの言葉を呟いた。

即ち彼が逡巡したのは、絶対に実現できないと裏切られた、自分の理想のこと。

一の不幸で百が幸福になるのなら、容赦なく一を切り捨てる。守護者だった彼はそうやって世界の安寧を守り続けた。

しかしそれは「正義の味方」では、無い。

切り捨てられた少数の死屍累々の上に成り立つ、ただ正しいだけの現実。

そんなもの——衛宮士郎はいらない。

ここは異世界だと言っていたが、場所など関係ない。

白鯨討伐が終わり、歓喜に涙を流す者もいれば、同胞が死んだ悲しみに泣く者もいる。——その光景を見て、エミヤは人が悲しむ姿は、心底見たくないと思うのだ。

在り方も理想も、その魔術ですら偽物の彼だった。

でも、だからどうした。

時にはエミヤらしく理知的に。時には衛宮らしく愚直に。

差し当たり、この英雄譚は——。

「アーさん！作戦会議すつから、こつち来てくれ！」

声の方を見れば、既に作戦参加者の面々が集まっていた。スバルを囲うように、レム、ヴィルヘルム、フェリス、リカード、ユリウス、そしてほかの全隊員も同じく。

あとはアーチャー最後のピースだけだったのだろう。

「……ああ、勿論だ」

スバルと呼ばれ、アーチャーは其方へと歩みを進め。

そして、——英雄譚が幕を上げた。

即ち、理想を追いかけ、理想に殺され、理想に裏切られた英雄の……

あの日の青年の。

再びゼロから始まる『正義の味方の異世界生活』が。

【白鯨討伐編】完

森が、泣いていた。

森が一つとなつて泣いていた。

「ああ、やつと……やつと、会えますね。今までは福音書に従つて動いていたから、仕方なく会えませんでした。私も悲しかった。そう、悲しかったのです」

怪人……とでも言えばいいのか。全身を包帯で巻き、鎖を巧みに使つて木々の間を移動していた女がいた。彼女もまた、周りに生きる万象と共に悲しんでいた。

しかし、一転。

どういうことか、次の瞬間には森が歌い始めた。

「漸く福音書すらも、私の『愛』を理解してくれたのでしようか。もしそうなら、それは嬉しいことです。

しかし、それならもつと早くわかつて欲しかった、というのは私の我儘でしょうね。彼のことになると少し我を押し通しちゃうところは、私のいけないところですよ。それは直しますよ、はい。

でも、そうだとしても、彼と会えるのは嬉しいです。それは福音書の記述には感謝しないと駄目ですよ。ありがとうございます」

高揚を極めているためなのか、彼女の言葉は誰に向けられているかさえ、はつきり分からない。恐らくは、自分の感情を抑えきれないが故の独り言だろう。

ただ一つだけ明確に言えるのは、彼女の感情は全ての思考を誘導する悪魔的な性質を振り撒いているということだけ。

人間の思考だけではない。小動物も、鳥も、虫も、木々でさえ、彼女の感情を半強制的に押し付けられていた。

だから、だ。だから、森が喜びに歌っているのだ。
すると、唐突に女の感情は百八十度別の方向へと向いた。

「それにしても——不快ッ！憎い憎い憎い憎い憎いッッ！」
森もまた、不吉な雰囲気纏う。

先程までは、葉と葉の隙間から太陽の光が射し込んでいたが、景色すら一変。森の様相は、より一層木々が生い茂った密林のようにも見え始め、遂には『憤怒』に身を焦がす女と同調する。

「クソ半魔なんて焼いて、焦がして、ぶっ殺せばそれでいいだろうが！
クソ福音書がア!!」

私と夫の愛の試練だとしても言うのか！精霊なんてどうせ臭い！クソ半魔なんて、ドブに湧く虫の如く、汚えもんだろうが！クソクソクソクソクソッッッ！」

彼女を取り巻く全ての感情が反転する。

哀から喜へ、喜から怒へと縦横無尽に。

起伏の激しい喜怒哀楽。おぞましい迄の変化。

「あああああ！待ってろ、クソ半魔ア！」

際限なく撒き散らす狂気。あるがままに怪人。

それは、異常そのもの。アーチャーイレギュラーの転移イレギュラーには、異常事態を。

彼がこの世界に生まれたことで福音書の記述に変化が生まれたのだ。

スバルでさえ未だ知らない不測の悪夢。

即ち、——魔女教大罪司教『憤怒』担当シリウス・ロマネコンティの介入。

「私の夫に試されるといふ幸福を、テメエの身の程を理解させた上で、
生きたまま焼いて、苦痛の末にぶっ殺してやる!!」

森は燃えていた。

シリウスの憤怒に燃えていた。

▷▷ To be continued